令和元年

大学生の地元意識と就業に関する意識調査報告書

2020年３月

弘前大学人文社会科学部

弘前大学特定プロジェクト教育研究センター
地域未来創生センター
Innovative Regional Research Center

はじめに

本報告書は、弘前大学人文社会科学部地域未来創生センターによる調査・研究活動の一環として行った「大学生の地元意識と就業に関する意識調査」の結果を取りまとめたものであります。

本調査は、弘前大学の在学生の地元意識と就業に関する意識について調査し、若年者の県外流出を抑制し、地元定着を促進するための対策を講ずるべく、その基礎資料として利用することを目的としています。人口減少問題は地域社会の根幹を揺るがず最重要かつ解決が急がれる問題であります。地域の人口水準は、流入人口と流出人口の差で変動するものであります。出生者数と死亡者数の差による自然動態は政策的な誘導が大変難しいと言われています。他方、若者の流入と流出は政策的な誘導可能性が比較的高いと筆者らは考えています。若者たちの就業先の選択行動を正確に把握することは彼らの地元定着を催す政策を検討するうえで必要不可欠だと思います。

本調査報告書が、若年者の地元定着支援策を模索し、若年者人口流出を食い止める有効な対策を立案する上で貴重な基礎資料として一助になれれば幸いです。

この調査にあたり、ご協力いただきました皆さまや関係機関などに、心から感謝申し上げます。

2020年３月

弘前大学特定プロジェクト教育研究センター
地域未来創生センター長　李　　永　俊

目　次

はじめに
第１章　調査の概要 …… 1
１．調査の目的 …… 1
２．調査方法 …… 1
３．調査結果の概要 …… 2
４．本報告書の概要 …… 5
第２章　社会経済環境と希望就業地 …… 7
１．はじめに …… 7
２．個人属性別地元就業希望有無 …… 8
３．家族環境と地元就業規模有無 …… 9
４．専門、希望業種と地元志向 …… 13
５．地元就業希望有無の決定要因 …… 15
5-1　就業地決定モデル …… 15
5-2　回帰分析 …… 17
６．小括 …… 18
第３章　青森県と北海道出身者の比較 …… 19
１．はじめに …… 19
２．就業希望地と個人属性 …… 19
３．地元外の就業希望地 …… 20
４．家族環境と地元希望有無 …… 21
５．専門、希望業種と地元志向 …… 21
６．地元就業希望有無の決定要因 …… 24
７．小括 …… 25
第４章　学生の地元就職に関する意識の分析 …… 27
１．はじめに …… 27
２．地元就職意識と高校までの体験学習の関連 …… 27
３．地元就職意識と弘前に対する意識との関連 …… 32
４．決定木を用いた地元就職志向の決定要因の分析 …… 34
５．アソシエーション分析を利用した弘前市に対する態度と体験学習の関係の考察 …… 42
６．まとめ …… 44
第５章　体験学習と課外活動の関係の分析 …… 47
１．はじめに …… 47
２．体験学習と震災ボランティアの関係 …… 47
３．体験学習とより広いボランティア活動 …… 52
４．体験学習と大学進学後の課外活動の関連 …… 55
５．まとめ …… 63
参考資料 …… 67
１．回答者の集計表 …… 67
２．回答者用質問紙 …… 78

第１章　調査の概要

李　　永　俊

１．調査の目的

本調査事業は、本学在学中の学生の皆さんの地元意識と就業に関する意識について調査し、若年者の県外流出を抑制し、地元定着を促進するための対策を講ずるべく、その基礎資料として利用するために実施したものである。また、本学で広く実施している地域志向教育の教育効果を客観的に明らかにし、その課題と今後の教育改善につなげるためのエビデンスを提供することも目的の１つである。

人口減少問題は、弘前市にとって解決が急がれる最重要課題の１つである。なかでも、20 ～ 24 歳の若年者の人口流出が顕著であり、このような人口流出の流れを変え、若年者の地元定着を促進させるために、2015 年と 2016 年に弘前市と連携して市内の大学生・企業の就職に関する実態調査を実施した。その結果、大学で実施している地域志向教育が大学生の地元意識、そして地元就職を促す効果が認められる結果が得られた。しかし、そのような地域志向教育の教育効果をより厳密に証明するためには、教育前と教育後の意識の変化を追跡調査する必要がある。大学入学時から卒業時までを追って調査し、地元志向教育の教育効果を明らかにする目的で本調査を実施した。ここでは、第１回目の調査の概要を紹介したい。

２．調査方法

調査方法の概要は以下のとおりである。

・調査地点と回答者数

調査対象地域は、医学部医学科を除いた 2019 年 4 月弘前大学入学の１年次在学生 1,265 名を対象にした。

・抽出方法

サンプルの抽出は行わず、全数調査を実施した。

・調査法

調査は基礎ゼミナールの担当教員の協力を得て、ゼミナールを通して配布・回収する質問紙による集団調査法で実施した。

・調査期間

2019 年 5 月

3．調査結果の概要

○　回収状況

対象者からの回答は 1,061 名で、有効回答率は 1061/1265 で 83.9%だった。

○　回答者のプロフィール

表１　回答者の性別

	度数（人数）	構成比（%）
男性	538	50.7
女性	519	48.9
不明	4	0.4
合計	1061	100.0

表２　回答者の所属学部

	度数（人数）	構成比（%）
人文社会科学部	216	20.4
教育学部	148	14.0
理工学部	313	29.5
農学生命科学部	187	17.6
医学部保健学科	191	18.0
不明	6	0.6
合計	1061	100.0

表３　回答者の実家の所在地

	度数（人数）	構成比（%）
北海道	303	28.6
青森県（弘前市・つがる地域）	266	25.1
青森県（弘前市・つがる地域以外）	133	12.5
岩手県	78	7.4
秋田県	67	6.3
宮城県	36	3.4
山形県	17	1.6
福島県	13	1.2
関東甲信	80	7.5
東海・北陸	35	3.3
近畿	9	0.9
中国・四国	5	0.5
九州・沖縄	4	0.4
外国	4	0.4
不明	11	1.0
合計	1061	100.0

表４　回答者の就業希望地

	度数（人数）	構成比（%）
北海道	245	23.1
青森県	266	25.1
岩手県	56	5.3
秋田県	39	3.7
宮城県	68	6.4
山形県	14	1.3
福島県	11	1.0
関東甲信	267	25.2
東海・北陸	32	3.0
近畿	18	1.7
中国・四国	1	0.1
九州・沖縄	4	0.4
外国	21	2.0
不明	19	1.8
合計	1061	100.0

表５　希望地の地元有無

	度数（人数）	構成比（%）
地元	719	67.8
地元外	332	31.3
不明	10	0.9
合計	1061	100.0

表６　回答者の希望職種（民間公務別）

	度数（人数）	構成比（%）
民間企業	206	19.4
公務員	370	34.9
どちらでも	480	45.2
不明	5	0.5
合計	1061	100.0

表７　回答者の希望業種別（複数回答）

	度数（事業所数）	構成比（%）
公務	486	45.8
農林漁業	92	8.7
建設業	47	4.4
製造業	188	17.7
電気・ガス・水道業	49	4.6
運輸・通信業	73	6.9
卸売・小売業	52	4.9
サービス業	159	15.0
金融・保険業	90	8.5
不動産業	25	2.4
教育・学習支援業	280	26.4
医療・福祉	254	23.9
飲食業・宿泊業	53	5.0
その他	57	5.4

４．本報告書の概要

調査結果は、いくつかの視点から分析を行った。おおよそ、それぞれの視点で各章が構成されている。

第２章では、若者を取り巻く家族環境、希望職種などによって希望就業地選択行動がどう変わるのかについて分析を行った。分析の結果、地元に積極的に残る条件として、長子であること、公務員、教育・学習支援、医療・福祉分野の就業を希望していることが影響していることが分かった。他方、両親ともに地元外出身、あるいは希望職種が製造業である若者は地元外を選択する傾向があることが分かった。また、北海道出身者は強く地元で就業することを希望していることが分かった。

第３章では、北海道と青森県の出身者に絞って、両地域の差に焦点を当てて、若者の地元就業希望有無を検討してきた。分析から、青森県では男女間に明確な差があり、特に若年女性の流出傾向が統計的にも明らかになった。また、第２章にも述べたように、ひとり親家族、両親ともに地元外の出身者など、地域の中の疎外層に流出傾向が見られる。そして、仕事要因が希望就業地を選択する上で大きな要因であることが分かった。ただし、就業地の選択が先か、職業の選択が先かについては、より詳細な分析が必要である。

第４章では、地元就職志向について、主に体験学習、地域への愛着などと関連して分析を行った。分析の結果、地域のイベントに関連した体験は地元就職志向を高め、野外キャンプや仕事に関する調査などは地元外就職志向を高める傾向が示された。また、青森県出身者については特に、高校での地域のイベントに関連した体験が地元就職志向を高める傾向が示された。地元就職志向と地元外就職志向についてより細かくタイプ分けを行うと、青森県出身者については地域から離れることが困難なタイプ、地域に愛着があるタイプ、公務員志望のタイプ、弘前大学が第一志望であるタイプ、大学での学びに期待しているタイプが地元就職を志向する可能性が示唆された。一方で、地域を離れることが容易なタイプ、地域から疎外感を感じているタイプ、弘前大学が第一志望でないタイプについては地元就職を志向しない傾向が示された。また、体験学習と地域に対する態度については、あまり強い関係は見られなかった。

第５章では、体験学習が課外活動に与える影響を、震災関連ボランティア、より広義のボランティア、大学入学後のアルバイト、大学入学後のサークル活動のそれぞれについて分析した。震災関連ボランティアについては、出身地域が東北地方かそれ以外かで傾向に

差があるが、調べ物系の体験学習は震災に関する関心の喚起や産品の購入活動に、地域のイベントに関連した体験はボランティア活動や物資の提供に、影響する傾向が示された。また、体験学習を全く経験しないと震災ボランティアに従事しない傾向が強まることも示された。より広義のボランティアについては、地域のイベントに関する体験がボランティアへの従事を高める可能性が示された。大学入学後の課外活動について、青森県出身者と青森県外出身者を比較すると、青森県出身者のほうがアルバイトに従事する比率が高く、青森県外出身者のほうがサークルなどの活動に参加する比率が高いことが示された。また、アルバイトについては青森県出身者は地域のイベント関連の体験が影響しているが青森県外出身者にはその影響が見られなかった。また、高校時代のアルバイト体験がそのまま大学でのアルバイトにつながっている可能性も示された。一方、サークル活動については地域のイベントに関する経験よりは、習い事などの経験のほうが影響が大きいことが示唆された。また、体験学習を経験していないと、サークルなどの活動に従事しない傾向が示された。

第２章　社会経済環境と希望就業地

李　　永　俊

１．はじめに

ここでは、若者を取り巻く家族環境、希望職種などによって希望就業地選択行動がどう変わるのかを明らかにしたい。

まず、弘前大学教育推進機構キャリアセンターの卒業生就職先・進学先一覧から弘前大学出身者の就職先について見てみたい[1]。

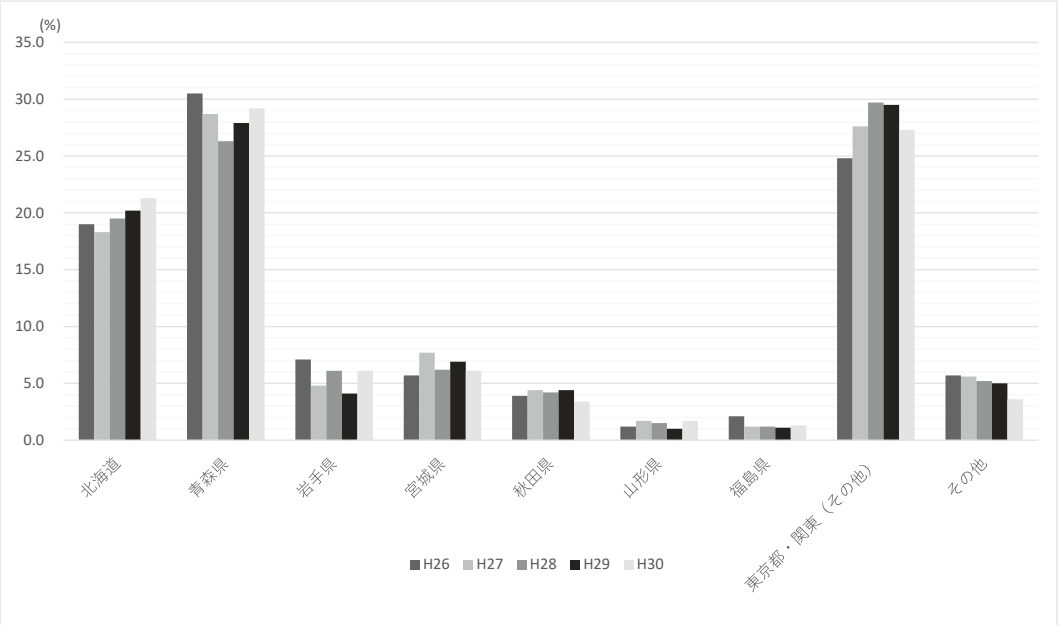

図１　卒業生の就職先

図１は過去５年間の卒業生の就職先を地域別にまとめたものである。まず、平成30年度卒業者を見ると、最も多いのは青森県内の就職者で、29.2％（274名）となっている。次に多いのは、東京都・関東で27.3％（257名）となっている。その次は、北海道で21.3％（200名）となっている。また時系列的なトレンドを見ると、北海道は平成27年度卒から継続的に増加している。他方、青森県の場合は、平成26年度卒が最も多く、３割を超えていたが、その後は減少し、平成28年度卒以降再び上昇している。しかし、ピー

[1] 就職データの詳細についてはこちらのご参照ください。
https://www.hirosaki-u.ac.jp/shushoku/publication.html

クだった平成 26 年度卒の水準までには達していない。

関東圏への就職者は、青森県内就職と真逆の動きをしており、平成 26 年度卒以降継続して上昇していたが、平成 29 年度卒者から減少に転じている。その他の地域への就職者は、宮城県、岩手県、秋田県で５％前後の就職者があるのみである。以上から弘前大学生の就職先は、青森県、東京・関東圏、北海道で約８割を占めていることが分かる。

この章では、2019 年４月に入学した１年生を対象とした調査結果を用いる。そのため、希望就業地は今後変わりうることが十分に考えられる。本調査の主目的は大学における地域志向教育が大学生の就業地選択にどのように影響を及ぼしているかを明らかにするためである。ここでは大学教育を受ける前の若者たちの希望就業地について、彼・彼女らを取り巻く社会経済環境がどのように影響しているのかを明らかにしたい。

２．個人属性別地元就業希望有無

ここでは、個人属性別に地元就業希望有無を見てみたい。ここでは、1,061 名の有効回答から性別、学部、実家の所在地、そして家族構成について、無回答だった 78 名を除いた 983 名のデータを用いて分析を行う。また、希望就業地の地元と地元外については、次のように定義する。本調査では、問 10 で希望就業地を、問 31 で実家の所在地を質問している。この２つの質問の回答が同じ場合は「地元（地元志向）」、異なる場合を「地元外（地元外志向）」として定義する。

個人属性としては、性別、実家の所在地別に整理した。表１の性別の特徴をみると、男女ともに約７割が地元を、３割弱が地元外を希望していることが分かる。性別の差は統計的に認められなかった。次に、出身地域別にみると、地元就業希望が最も強いのは関東甲信出身者で 87.5％が地元での就業を希望していた。次は北海道出身者で、76.1％が地元での就業を希望している。その次は山形県、福島県となっている。逆に地元志向が最も弱いのは、秋田県の 61.3％であり、その次は青森県（弘前･つがる地域）65.1％、青森県（弘前･つがる地域以外）66.1％となっている。出身地域別に地元志向には明確な差があることがカイ二乗検定で明らかになった。北海道と秋田県では、地元希望者の割合が 14.8 ポイントも差があり、若者の地元定着、あるいは一時的に流出しても戻って来る割合に大きな差があることが分かる。

このような差が何に起因するのかを特定することは、若年者の人口流出による人口減少

表１　性別・出身地別地元就業希望有無

（単位：％）

	性別	地元希望有無 希望	地元希望有無 希望しない	合計（括弧内人数）
性別	男性	70.6	29.4	100.0（493）
	女性	70.4	29.6	100.0（490）
出身地	北海道	76.1	23.9	100.0（285）
	青森県（弘前市・つがる地域）	65.1	34.9	100.0（255）
	青森県（弘前市・つがる地域以外）	66.1	33.9	100.0（127）
	岩手県	69.0	31.0	100.0（71）
	秋田県	61.3	38.7	100.0（62）
	宮城県	69.7	30.3	100.0（33）
	山形県	75.0	25.0	100.0（16）
	福島県	75.0	25.0	100.0（12）
	関東甲信	87.5	12.5	100.0（72）
	東海・北陸	68.8	31.3	100.0（32）

注）カテゴリー内の人数が 10 名以下だった地域については掲載していない。性別についてはカイ二乗検定で有意でなかった。出身地については、Pearson chi 2(13) =29.47 Pr=0.006 で、１％水準で有意であった。

問題を抱えている地方においては大変重要な問題となる。また、増田（2014）などが主張するように、地方から合計特殊出生率が極端に低い東京圏への人口移動が日本全体の人口減少に拍車をかけていることを考えると、流出の要因を明らかにすることは人口減少問題の解決策を考える上で必要不可欠である。

３．家族環境と地元就業規模有無

ここでは、若者を取り巻く家族環境と地元就業希望有無を検討したい。樋口（1991）によると少子化によって若者の地元志向は高まっているといわれている。図２は総務省「住民基本台帳人口移動報告」を用いて、三大都市圏と地方圏の転入人口から転出人口を差し引いた転入超過人口の時系列推移を図示したものである[2]。図２が示しているように、高度成長期の 1962 年には地方圏から 64.4 万人も流出していたのに対し、2018 年では 11.6

[2]地域区分は次の通りである。東京圏は埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、名古屋圏は岐阜県、愛知県、三重県、大阪圏は京都府、大阪府、兵庫県、奈良県である。なお、地方圏は三大都市圏以外の地域を指す。

図２　都市圏地方圏別転入超過数推移

出典：総務省「住民基本台帳人口移動報告」を用いて筆者作成。

万人で流出者数は大幅に減少している。また、厚生労働省の「人口動態調査」によると、1962 年の出生数が 1,618,616 人であったのに対し、2018 年の出生数は 921,000 人で大幅に少子化が進行している。

この２つの事実から少子化の影響による地元志向の高まり、つまり転出の減少はマクロ的には認められると言える。しかし、現在でも東京圏には 13.5 万人もの転入超過があり、地方圏からの継続的な流出は食い止められていない。その点を考慮すると、地方からの若者の流出要因については、ミクロレベルでのより詳細な分析が急がれる。ここでは、若者を取り巻く家族環境を中心に地元就業希望有無を明らかにしたい。

まず、家族形態について注目する。三世代家族か核家族かによって地元志向が異なることは容易に考えられる。ただし、三世代であることは若者にとって、地元に留まる要因にも、逆に地元から離れる要因にもなりうる。ここでは家族形態を３つのタイプに分類する。第１タイプは三世代家族で、両親と祖父・祖母が一緒に暮らしている家族である。また、両親のいずれかと祖父・祖母と一緒に暮らす場合もタイプ１に分類した。第２タイプは、核家族で両親と子どもで構成される二世代家族である。第３タイプはひとり親家族とした。また、家族関係は男女によって受け止め方が異なることを想定し、男女別に地元希望有無を整理した。

表２　家族形態別地元就業希望有無

		地元希望有無	
	家族形態	希望	希望しない
男性	三世代家族	72.7	27.3
	二世代家族	70.0	30.0
	ひとり親家族	69.1	31.0
女性	三世代家族	68.6	31.4
	二世代家族	71.7	28.3
	ひとり親家族	68.1	31.9

注）男性　Pearson Chi(2)=0.37 Pr=0.831, 女性　Pearson Chi(2)=0.60 Pr=0.742.

表２を見ると、家族形態に関わらず概ね７割が地元就業を希望し、３割が地元外を希望していることが分かる。また、男性は三世代が最も高く、二世代、ひとり親家族となっているのに対し、女性は二世代、三世代、ひとり親順になっており、男女間に三世代に対する受け止め方に若干違いがあることが推測される。また、男女ともにひとり親家族の地元希望割合が低い点が注目される。ただ、統計的な有意差は認められなかった。

次に家族構成について見てみたい。ここでは、兄弟姉妹の有無と出生順位によって、長子（長男・長女）と、長子以外、ひとりっ子の３つのタイプに分類した。

表３の男性を見てみると、長子は78.4％が地元就業を希望していることが分かる。家を継ぐあるいはお墓を守るなど、伝統的な家の継承の意識が若者にも残されていることが分かる。次にひとりっ子70.3％、最後に長子以外の子68.5％となっている。他方、女子では長子、長子以外の子、ひとりっ子の順にはなっている。男女ともに統計的に有意な差は認められなかった。

次に注目したのは、実家の所在地が両親の出身であるか否かである。家の継承などを考えると、両親の出身地であるということはより重きをおく要因にもなる。また、両親の出身地であれば、親せきなどとのより密接な人的関係があることも考えられる。そして、地域への理解や地域内のつながりなども、地域外からきた家族に比べ多いことが予想される。表４では、両親の出身地有無について、３つのグループに区分した。両親ともに出身地である場合と、両親いずれかの出身地であるケース、そして両親ともに出身地でないケースに分けた。

表３　家族構成別地元就業希望有無

（単位：％）

	家族構成	地元希望有無 希望	地元希望有無 希望しない	合計（括弧内人数）
男性	長子	78.4	21.6	100.0（88）
	長子以外の子	68.5	31.5	100.0（314）
	ひとりっ子	70.3	29.7	100.0（91）
女性	長子	74.7	25.3	100.0（83）
	長子以外の子	70.2	29.8	100.0（305）
	ひとりっ子	67.7	32.4	100.0（102）

注）男性　Pearson Chi(2)=3.27 Pr=0.195, 女性　Pearson Chi(2)=1.12 Pr=0.573.

表４　両親の出身地別地元就業希望有無

（単位：％）

	両親の出身地	地元希望有無 希望	地元希望有無 希望しない	合計（括弧内人数）
男性	両親とも地元	71.2	28.8	100.0（212）
	いずれかの地元	71.3	28.7	100.0（174）
	両親とも地元外	68.2	31.8	100.0（107）
女性	両親とも地元	79.8	20.2	100.0（178）
	いずれかの地元	68.6	31.4	100.0（194）
	両親とも地元外	59.3	40.7	100.0（118）

注)男性　Pearson Chi(２)=0.37 Pr=0.832, 女性　Pearson Chi(２)=14.78 Pr=0.001.

まず注目されるのは、男女ともに両親ともに地元外の場合は、地元就業を希望する者の割合が他のグループと比較して低い点である。男性の場合は、両親ともに地元出身と比較すると、3.0 ポイント低くなっている。女子ではその差がより大きく、両親ともに地元の場合は 79.8％が地元就業を希望しているのに対して、両親とも地元外の場合は 59.3％でその差が 20.5 ポイントにもなっている。また、女子ではカイ二乗検定でも有意で、統計的にその差が明らかである。

以上をまとめると、男性は長子であること、つまり家庭内の地位に大きく拘束されているのに対し、女子の場合は両親が地元出身かどうかに大きく影響を受けていることが分かる。また、ひとり親家族や地域とのつながりが薄い地元外出身家族の若者たちが流出しやすい傾向にあることが分かる。

４．専門、希望業種と地元志向

ここでは、若者らの専門と希望業種別に地元就業希望有無を見てみたい。まず、図５の学部別の違いを見てみたい。表から男女の学部別に大きな差があることが分かる。男性では、医学部保健学科が 87.8％で地元志向が最も高く、次に教育学部、農学生命科学部、人文社会科学部、理工学部の順となっている。最も高い医学部保健学科と理工学部とでは 25.6 ポイントの差がある。他方、女性では最も高いのが教育学部で 82.1％が地元志向である。次は医学部保健学科、農学生命科学部、人文社会科学部、理工学部の順で、男性と同様、理工学部が最も低くなっている。専門は就職先を選択するうえで最も重要な要因であ

表５　学部別地元就業希望有無

（単位：％）

	学部	地元希望有無 希望	地元希望有無 希望しない	合計（括弧内人数）
男性	人文社会科学部	72.9	27.1	100.0（70）
	教育学部	84.4	15.6	100.0（45）
	理工学部	62.2	37.8	100.0（230）
	農学生命科学部	73.7	26.3	100.0（99）
	医学部保健学科	87.8	12.2	100.0（49）
女性	人文社会科学部	64.6	35.4	100.0（130）
	教育学部	82.1	17.9	100.0（95）
	理工学部	57.1	42.9	100.0（56）
	農学生命科学部	64.9	35.1	100.0（77）
	医学部保健学科	76.5	23.5	100.0（132）

注）男性　Pearson Chi(2)=19.61 Pr=0.001, 女性　Pearson Chi(2)=16.53 Pr=0.002.

り、地域間の産業構造の差が若者の就業地選択を左右していることが分かる。

次に、男女別の民間・公務別就業希望だが、男性では民間のみが最も少なく106名（21.5％）、公務員希望が159名（32.6％）、どちらでもが228名（46.3％）となっている。女性でも男性と同じく民間希望者が86名（17.6％）で最も低く、公務員希望191名（39.0％）、どちらでもが213名（43.5％）となっている。弘前大学キャリアセンターの平成30年度卒業生の就業先を見ると、939名の就業者の内、310名（33.0％）が公務の仕事（学校教育を含む）についている。希望水準より若干低いが概ね希望通りに就業先を選択している様子がうかがえる。また、地元志向有無を見ると、男女ともに公務員希望者に地元志向が圧倒的多く、民間希望者に地元を希望しないものの割合が高いことが分かる。その差は男女ともに統計的にも有意である。

表６は民間企業か公務員希望かで地元志向有無を整理したものである。男女ともに、公務員希望者は、地元就業希望率が８割に上回っている。他方、民間企業希望者は男性では54.7％、女性では48.8％で公務員希望者とは大きな違いがあることが分かる。この表から職種によって就業先を変えている様子がよく分かる。そして、もう一点指摘したいのは、地元に残ろうとしている若者たちは地元の民間企業に期待を寄せていないという点である。その背景には、地域内の民間企業へのイメージが良くないことと、大学生が地域内の民間企業をよく知らないということが考えられる。

表６　民間・公務別地元就業希望有無

（単位：％）

		地元希望有無		合計（括弧内人数）
	民間・公務	希望	希望しない	
男性	民間企業	54.7	45.3	100.0（106）
	公務員	83.0	17.0	100.0（159）
	どちらでも	69.3	30.7	100.0（228）
女性	民間企業	51.2	48.8	100.0（86）
	公務員	81.7	18.3	100.0（191）
	どちらでも	68.1	31.9	100.0（213）

注）男性　Pearson Chi(2)=19.61 Pr=0.001, 女性　Pearson Chi(2)=16.53 Pr=0.002.

表７　業種別地元就業希望有無

（単位：％）

	地元希望有無（男性）			合計（括弧内人数）	地元希望有無（女性）			合計（括弧内人数）
	希望	希望しない			希望	希望しない		
農林漁業	78.6	21.4		100.0（56）	66.7	33.3		100.0(33)
建設業	64.5	35.5		100.0（31）	66.7	33.3		100.0(12)
製造業	59.3	40.7	***	100.0(113)	54.2	45.8	***	100.0(59)
電気・ガス・水道業	71.1	29.0		100.0(38)	42.9	57.1		100.0(7)
運輸・通信業	61.7	38.3		100.0(47)	50.0	50.0	**	100.0(20)
卸売・小売業	60.0	40.0		100.0(20)	76.9	23.1		100.0(26)
サービス業	66.2	33.9		100.0(65)	57.3	42.7	***	100.0(82)
金融・保険業	57.8	42.2	**	100.0(45)	62.2	37.8		100.0(37)
不動産業	42.9	57.1	**	100.0(14)	50.0	50.0		100.0(10)
教育・学習支援業	77.9	32.0		100.0(122)	79.0	21.1	***	100.0(133)
医療・福祉	77.2	22.8		100.0(79)	73.6	26.4		100.0(159)
飲食業・宿泊業	62.5	37.5		100.0(24)	63.0	37.0		100.0(27)
その他	50.0	50.0	***	100.0(32)	40.0	60.0		100.0(20)

注）カイ二乗検定で * は 10％水準、** は５％水準、*** は１％水準で有意であることを意味する。

表７は、業種別に地元就業希望有無をまとめたものである。男性で地元希望有無が統計的に有意な差が認められたのは、製造業、金融・保険業、不動産業で、これらの業種は他の産業と比較すると地元外を希望する割合が高い。女性で統計的に有意な差が見られたのは、製造業、運輸・通信業、サービス業、教育・学習支援業であった。教育・学習支援業を除いては全て地元外を希望する割合が高い。以上の結果を総合すると、若者たちは地域間の産業構造の差をしっかり見抜いて、それに合致した合理的な選択を行っていると言える。

５．地元就業希望有無の決定要因

5-1　就業地決定モデル

ここでは、若者の就業地選択行動を簡単な経済モデルを用いて検討してみたい。個人の満足度を表す効用関数は、仕事から得られる収入や満足感と、地域特殊資本に依存していると考える。ここでいう地域特殊資本には、家族や地域内の人的ネットワーク、あるいはお祭りなどの地域の文化資源などが含まれる。家族との団らんや地域の中間との交流は、人々の満足を高める。また、お祭りなど文化体験も個人の満足度を高める要因となる。

そこで、実家の所在地つまり地元での効用関数を U_0、地元外の効用関数を U_1 とすると

$$U_0 = U_0(y_0, C)$$
$$U_1 = U_1(y_1)$$

ここで y_0 と y_1 は、それぞれ地元と地元外での仕事から得られる収入と満足感を表し、C は地域特殊資本を表している。そして、個人の地元に残るか地元を出るかの経済合理的な決定は、U_0 と U_1 の比較で決まる。

もしも $U_0 > U_1$ であれば、地元に残り、逆に $U_0 < U_1$ であれば、地元を出る選択をするはずである。また、等号が成立する場合は、完全に無差別となる。

以上の経済モデルから、次のような比較静学分析結果が得られる。まず、地元で得られる仕事からの満足度が高ければ、地元に留まることが予想される。逆に地元外での仕事満足度が高ければ、地元を出る可能性が高いことが分かる。このような傾向は、多くの地域間賃金格差と地域間移動の研究から明らかになっている。次に、地域特殊資本の大きさである。地元での地域特殊資本の満足度が高ければ地元での定着を選択する可能性が高くなる。

5-2　回帰分析

ここでは、ロジットモデルを用いて地元就業希望を決める決定要因を推定してみたい。被説明変数は、地元就業希望を１、希望しないを０としたダミー変数を用いた。上記の経済モデルに従い、説明変数として地域特殊資本を表す変数と仕事関連変数を用いた。具体的には以下の通りである。全て該当する場合は１、非該当の場合は０のダミー変数を用いた。説明変数には、個人属性として男性ダミー変数、家族環境として、三世代家族、ひとり親家族、長子、ひとりっ子、両親ともに地元、両親ともに地元外の６つのダミー変数を用いた。そして文化体験については、「地域の祭りに参加したことがあるか」、「地域のイベントに参加したことがあるか」「地域のイベントのお手伝いやごみ拾いなどに参加したことがあるか」の質問に対し、小中高で体験した場合は１、体験していない場合は０とした変数を足し合わせ、合計が６点以上、つまり各項目に２回以上の経験がある場合は文化体験ダミーを１、それ以下の場合は０とした。

そして、職業希望には、公務員、製造業、金融・保険業、サービス業、教育・学習支援、

表８　回帰分析結果

	モデル1			モデル2		
変数	係数		標準偏差	係数		標準偏差
男性ダミー	-0.0592		0.1462	0.1016		0.1570
三世代家族ダミー	0.0106		0.1703	0.0134		0.1760
ひとり親家族ダミー	-0.0797		0.2537	0.0106		0.2608
長子ダミー	0.4530	**	0.2070	0.3215		0.2145
ひとりっ子ダミー	-0.0270		0.1846	-0.0252		0.1930
両親とも地元ダミー	0.1482		0.1710	0.0794		0.1769
両親とも地元外ダミー	-0.3327	*	0.1904	-0.4513	**	0.1979
文化体験ダミー	0.2228		0.1487	0.1751		0.1545
青森県出身ダミー	-0.2577		0.1698	-0.2257		0.1770
北海道出身ダミー	0.3062		0.1962	0.6248	***	0.2072
公務員希望ダミー				0.9491	***	0.1920
製造業希望ダミー				-0.3804	*	0.1984
サービス業ダミー				-0.0267		0.2162
金融・保険業ダミー				-0.3945		0.2649
教育・学習支援ダミー				0.3978	**	0.1919
医療・福祉ダミー				0.5258	***	0.1980
定数項	0.7972	***	0.2101	0.3016		0.2524
サンプルサイズ		953			953	
Pseude R2		0.0207			0.0736	

注）* は 10%水準、** は５％水準、*** は１％水準で有意であることを意味する。

医療・福祉の６つのダミー変数を用いた。ここで専門を表す学部変数は、職業希望との多重共線性を考慮し、説明変数から取り除いた。最後に上記の変数だけではとらえきれない地域の特殊性を取り除くために青森県出身ダミー、北海道出身ダミーを用いた。

分析結果は表８の通りである。表８のモデル１は、説明変数に個人属性と地域特殊資本を表す変数のみを用いて、地域特殊資本が就業地選択にどのような影響を与えるのかを検討した。モデル１で長子ダミーが有意で正の係数を示している。つまり、長子であれば、地元を志向する傾向が強いことを表している。次に有意になっているのは、両親とも地元外ダミー変数で地域外から移住してきている家族の若者たちの定着確率が低いことが分かる。

次にモデル２では仕事関連変数をモデル１に加えた。分析結果から両親とも地元外ダミー変数はモデル１と同じ結果を示している。また、出身地ダミーであるが、青森県出身ダミーは負、北海道出身ダミーは正の係数で有意となっており、両地域間に大きな違いがあることが分かる。忘れてはならないのは、北海道出身者については進学の段階で一度地元を離れているにも関わらず、有意に正となっており、地元での就業を強く希望していることが分かる。

仕事関連の変数については､公務員希望ダミー変数が有意で強く正を示している。ただ、地元に残るために公務員を選んでいるのか、公務員の仕事を希望している若者に地元志向が強いのか解釈が難しい。地元に残るために公務員を選んでいるのか否かについては、より詳細な分析を行う必要がある。他の産業をみると、教育・学習支援と医療・福祉ダミー変数が正で有意となっており、この分野を希望している若者たちの地元志向が強いことが分かる。逆に製造業は負の係数を示しており、製造業での就業を希望している若者たちは流出の可能性が高いことが分かる。

６．小括

本章では、個人属性、家族環境、希望職種と地元就業希望有無との関係を、調査結果を用いて分析した。分析の結果、地元に積極的に残る条件として、長子であること、公務員、教育･学習支援､医療･福祉分野の就業を希望していることが影響していることが分かった。他方、両親ともに地元外出身、あるいは希望する産業が製造業である若者は地元外を選択する傾向があると思われる。また、北海道出身者は強く地元で就業することを希望していることが分かった。青森県出身と北海道出身者の差については次の章で詳細に述べたい。

《参考文献》

増田寛也（2014）『地方消滅―東京一極集中を招く人口急減―』中公新書

樋口美雄（1991）『日本経済と就業行動』東洋経済新報社

第３章　青森県と北海道出身者の比較

李　　永 俊

１．はじめに

前章で見たように、青森県出身者と北海道出身者では地元就業希望有無に大きな差があることが分かった。そこで、本章では青森県出身者と北海道出身者に絞って、両地域間の差の理由を明らかにしたい。前章にも述べたように、北海道出身者は近いとはいえ、地元を離れて進学している事実に注意が必要である。

２．就業希望地と個人属性

ここでは、青森県出身者と北海道出身者の性別に地元就業希望有無を見てみたい。地元と地元外の定義は前章で述べたとおりである。

表１　出身地域別、性別地元希望有無

(単位：%)

	青森県		北海道	
性別	地元	地元外	地元	地元外
男性	69.4	30.6	77.1	22.9
女性	64.3	35.7	75.2	24.8
合計 （括弧内人数）	66.5(244)	33.5(123)	76.4(207)	23.6(64)

注）青森県　Pearson Chi(1)=1.07 Pr=0.302, 北海道　Pearson Chi(1)=0.12 Pr=0

まず、表１は合計欄を見ると、青森県出身者は地元希望者が 66.5%（244 人）であるのに対し、地元外は 33.5%（123 人）である。他方、北海道出身者は、地元希望者が 76.4%（207 人）、地元外希望者が 23.6%（64 人）で圧倒的に地元希望者の割合が高いことが分かる。青森県出身者と比較すると、地元希望者で 9.9 ポイントの差がある。

次に男女別の差を見てみたい。注目されるのは、北海道の場合は男女間にほとんど差がないということが分かる。他方、青森県の場合は、男性の地元希望者が 69.4%であるのに対し、女性は 64.3%で、5.1 ポイントの差がある。カイ二乗検定で統計的に有意ではなかったが、地元外を希望している割合が女性に高いということが、人口問題を考える上では大

変重要な意味を持つ。増田（2013）が指摘しているように、出産可能人口の女性の流出は地域の存続を脅かす重要な問題である。この点を考慮すると、青森県の男女間の差は大きな課題であると思われる。

３．地元外の就業希望地

次に、地元外を希望している者の希望就業地をまとめたのが表２である。表から、両地域ともに、関東甲信の希望者が圧倒的に多いことが分かる。その傾向は、青森県出身者より北海道出身者が強く、75.0％の者が関東甲信での就業を希望している。青森県の場合は、関東甲信 62.6％の次に宮城県が 17.9％となっており、流出者のほとんどが両地域に向かっていることが分かる。

表２　地元外の希望地域

（単位：％）

	青森県	北海道
北海道	6.5	-
青森県	-	1.6
岩手県	1.6	0.0
秋田県	0.0	0.0
宮城県	17.9	7.8
山形県	0.0	0.0
福島県	0.0	0.0
関東甲信	62.6	75.0
東海・北陸	1.6	3.1
近畿	3.3	4.7
九州・沖縄	0.0	3.1
外国	6.5	4.7
合計（括弧内人数）	100.0（123）	100.0（64）

表３　家族形態別地元希望有無

（単位：％）

	青森県		北海道	
家族形態	地元	地元外	地元	地元外
三世代家族	68.5	31.5	74.3	25.7
二世代家族	66.0	34.0	77.7	22.3
ひとり親家族	61.1	38.9	70.0	30.0
長子	73.3	26.7	86.4	13.6
長子以外の子	64.4	35.7	75.0	25.0
ひとりっ子	67.5	32.5	72.6	27.5
両親とも地元	69.2	30.8	81.0	19.0
いずれかの地元	65.5	34.5	75.4	24.6
両親とも地元外	64.4	35.6	68.1	31.9

注）カイ二乗検定で有意なものはなかった。

4.　家族環境と地元希望有無

ここでは、両地域の家族環境と地元就業希望有無を見てみたい。まず、表３の家族形態別に見ると、青森県の場合は、地元希望者の割合が高い順に、三世代家族、二世代家族、ひとり親家族の順になっているのに対し、北海道では二世代家族、三世代家族、ひとり親家族となっている。１点、指摘したいのは両地域ともにひとり親家族の地元志望者の割合が少ないという点である。

また、長子の地元希望者割合をみると、北海道出身者では86.4％で青森県出身者の73.3％を大きく上回っている。地域間に大きな違いがあることが分かる。また、両親の出身地については、両親ともに地元出身の場合は、両親ともに地元外の場合より地元希望者の割合が両地域ともに共通して高いことが分かる。

５．専門、希望業種と地元志向

ここでは、専門、希望業種別の違いを見てみたい。まず、表４は各学部別にまとめた結果である。青森県では、地元志向が高い順に、医学部保健学科、教育学部、農学生命科学

表４　学部別地元希望有無

（単位：％）

	青森県		北海道	
学部	地元	地元外	地元	地元外
人文社会科学部	59.3	40.7	79.4	20.6
教育学部	75.4	24.6	100.0	0.0
理工学部	59.6	40.4	67.6	32.4
農学生命科学部	66.7	33.3	75.0	25.0
医学部保健学科	76.9	23.1	88.6	11.4

注）青森県　Pearson Chi(4)=9.50 Pr=0.050, 北海道　Pearson Chi(1)=11.90 Pr=0.018.

部、理工学部、人文社会科学部の順になっている。他方、北海道では、教育学部、医学部保健学科、人文社会科学部、農学生命科学部、理工学部の順になっている。両地域ともに、教育学部と医学部保健学科が高く、理工学部が低くなっている。

このような学部間の違いは希望する職種にも表れる。表５は民間企業と公務員別にまとめたものである。表から公務員希望者の地元就業希望者の割合が圧倒的に高いことが分かる。両地域を比較すると、北海道のその割合が 11.5 ポイント高くなっており、93.1％とほぼ全員が地元での就業を望んでいることが分かる。また、民間企業者の地元希望者の割合にも両地域間の差は明確である。青森県は地元希望者が 38.3％であるのに対し、北海道が 61.4％で５割を大きく上回っている。この点は、両地域の民間企業への期待度の違いを表していると思われる。

次に産業別の違いを示しているのが表６である。まず、注目されるのは北海道ではすべての産業で６割以上の若者が地元での就業を希望しているのに対し、青森県では地元希望

表５　民間・公務別地元希望有無

（単位：％）

	青森県		北海道	
民間・公務	地元	地元外	地元	地元外
民間企業	38.3	61.7	61.4	38.6
公務員	81.6	18.4	93.1	6.9
どちらでも	62.6	37.4	76.9	23.1

注）青森県　Pearson Chi(2)=37.94 Pr=0.000, 北海道　Pearson Chi(2)=17.69 Pr=0.000.

表６　産業別地元希望有無

（単位：％）

	青森県			合計（括弧内人数）	北海道			合計（括弧内人数）
	地元	地元外			地元	地元外		
農林漁業	71.0	29.0		100.0（31）	77.3	22.7		100.0(22)
建設業	40.0	60.0	*	100.0（10）	60.0	40.0		100.0(15)
製造業	43.1	56.9	***	100.0(51)	65.7	34.3	**	100.0(67)
電気・ガス・水道業	55.6	44.4		100.0(9)	69.6	30.4		100.0(23)
運輸・通信業	38.1	61.9	***	100.0(21)	65.5	34.5		100.0(29)
卸売・小売業	69.2	30.8		100.0(13)	81.3	18.8		100.0(16)
サービス業	62.7	37.3		100.0(67)	65.1	34.9	*	100.0(43)
金融・保険業	51.4	48.6	**	100.0(35)	62.1	37.9	*	100.0(29)
不動産業	37.5	62.5	*	100.0(8)	62.5	37.5		100.0(8)
教育・学習支援業	77.8	22.2	***	100.0(108)	74.4	25.6		100.0(43)
医療・福祉	71.4	28.6		100.0(84)	81.0	19.1		100.0(63)
飲食業・宿泊業	52.2	47.8		100.0(23)	81.3	18.8		100.0(16)
その他	41.2	58.8	**	100.0(17)	75.0	25.0		100.0(12)

注）カイ二乗検定で * は 10％水準、** は５％水準、*** は１％水準で有意であることを意味する。

表７　ロジット分析結果

	青森県			北海道		
変数	係数		標準偏差	係数		標準偏差
男性ダミー	0.6115	**	0.2622	0.3336		0.3301
三世代家族ダミー	0.1277		0.2645	-0.1586		0.4643
ひとり親家族ダミー	-0.1531		0.4145	-0.2404		0.4741
長子ダミー	0.1088		0.3562	0.8498	*	0.5057
ひとりっ子ダミー	0.0518		0.3144	-0.2395		0.3922
両親とも地元ダミー	0.2682		0.2809	0.1125		0.3898
両親とも地元外ダミー	-0.1066		0.3331	-0.3529		0.4254
文化体験ダミー	0.4650	*	0.2531	0.4168		0.3444
公務員希望ダミー	1.2738	***	0.3078	1.6892	***	0.5913
製造業希望ダミー	-0.5618		0.3502	-0.7255	**	0.3539
サービス業ダミー	0.5939	*	0.3550	-0.1406		0.4131
金融・保険業ダミー	-0.5493		0.4125	-0.6169		0.4621
教育・学習支援ダミー	0.6439	**	0.3086	-0.7287		0.4584
医療・福祉ダミー	0.9650	***	0.3426	0.3592		0.4038
定数項	-0.6968	*	0.3803	0.9624	**	0.4687
サンプルサイズ	367			271		
Pseude R2	0.1184			0.1075		

注）カイ二乗検定で * は 10％水準、** は５％水準、*** は１％水準で有意であることを意味する。

者が５割を切っている産業が４つも見られる点である。青森県では、建設業、製造業、運輸・通信業、不動産業が５割を切っている。飲食業・宿泊業では北海道は 81.3％が地元を希望しているのに対し、青森県では 52.2％となっており、両地域間に大きな差があることが分かる。建設業、製造業、運輸・通信業においても明確な差が見られる。

この結果は、両地域の産業構造や産業基盤の差を反映していると思われる。特に国際的な観光地として知名度が高い北海道では、飲食業・宿泊業を希望している若者に強い地元志向が見られるのに対し､青森県では同産業では地元希望者が半数程度にとどまっている。

６．地元就業希望有無の決定要因

ここでは、前章と同じくロジットモデルを用いて地元就業希望を決める決定要因を推定してみた。被説明変数は、前章と同様、地元就業希望を１、希望しないを０としたダミー変数を用いた。説明変数も前章と同様である。前章と異なり、ここでは両地域間の差に注目して、結果を見てみたい。

まず、注目されるのは男性ダミーの違いである。青森県では５％水準で有意で、正の係数を示している。つまり、男性であればより地元希望者が多くなるということを示している。逆に言うと、女性であればより地元外への希望する確率が高くなるということを意味する。すべての条件をコントロールしても、有意な結果が得られたことに注意が必要である。他方、北海道では、係数は正であるが、有意ではなく男女間に大きな差が見られないことが分かる。

次に家族環境については、北海道の長子ダミー変数が 10% 水準で有意で、正の係数を示しており、長子であることが地元に留まる大きな要因であることが分かる。その他の家族環境では、ひとり親家族ダミー変数が負の係数を示しており、流出の要因になりうると言える。また、両親ともに地元外ダミーも両地域において負の係数を示している。予想通りの係数を示してはいるが、統計的には有意でなく、今後より詳細な分析を通して家族要因が若者の地元志向に与える影響についてその効果を明らかにしたい。文化体験ダミーは両地域とも正の係数を示しており、若者を地域に引き留める要因になっていることが分かる。青森県においては、10％水準で有意となっており、より大きな効果を示していることが分かる。

そして、希望職種では、公務員希望ダミー変数が両地域ともに正の係数で、１％で有意

となっており、強い引き付け要因となっていることが分かる。ただし、前章でも述べたように、地元に残るために公務員を選んでいるのか否かについては、より厳密な分析を行う必要がある。また、産業では製造業で両地域とも負の係数を示しており、両地域の産業基盤が不十分であることが分かる。次に、医療・福祉ダミーが両地域ともに正の係数を示しており、若者の地域での定着を促す産業であることが分かる。

7．小括

本章では、北海道と青森県の出身者に絞って、両地域の差に焦点を当てて、若者の地元就業希望有無を検討してきた。分析から、青森県では男女間に明確な差があり、特に若年女性の流出傾向が統計的にも明らかになった。また、前章にも述べたように、ひとり親家族、両親ともに地元外の出身者など、地域の中の疎外層に流出傾向が見られる。そして、仕事要因が希望就業地を選択する上で大きな要因であることが分かる。ただし、就業地の選択が先か、職業の選択が先かについては、より詳細な分析が必要である。

《参考文献》

石黒・李・杉浦・山口（2012）『「東京」に出る若者たち―仕事・社会関係・地域間格差』ミネルヴァ書房

増田寛也（2014）『地方消滅―東京一極集中を招く人口急減―』中公新書

第４章　学生の地元就職に関する意識の分析

花　田　真　一

１．はじめに

本章では、学生の地元就職に関する意識について分析を行う。近年、地方創生に関する議論の中で､大卒者の都市部への人口流出が地方衰退の要因として指摘されることがある。問題緩和のために大学が学生の地元定着に一定の役割を果たすことが期待されており、弘前大学でも地域志向科目や地域学ゼミナールを通じて学生の地元就職を促す試みがなされている。しかし、こうした取り組みの効果を検証するためには、そもそも学生が入学時点でどのような意識を持っているのかを把握したうえで、大学における教育が追加的にどのような効果をもたらすかを知る必要がある。本章では入学直後の４月から５月にかけて大学１年生に対して行ったアンケート調査に基づき、学生の入学時点での地元就職意識とその背景について分析を行う。

２．地元就職意識と高校までの体験学習の関連

分析を行う前に、地元就職について定義する。本調査では、問 10 で就職希望地を、問 31 で実家の所在地を質問している。この２つの質問の回答が同じ場合を「地元就職志向」、異なる場合を「地元外就職志向」として傾向の差を分析した。

まず、地元就職意識と高校までの学校の正課以外の学習の関係について分析する。本調査では、問 16 で小学校から高校までの正課以外の体験について質問を行っている。本章と次章では､こうした活動を体験学習と総称する。また､各質問項目は長いため､｢野外キャンプ（学校行事以外で、野外で炊事をしたりテントに泊まったりしたことがある）｣｢仕事調べ（興味のある仕事について、本やインターネットなどで調べたことがある）｣｢職場見学（職場見学や職場訪問をしたことがある）｣｢職業体験（４日以上の職場体験やインターンシップを体験したことがある）｣｢地域のまつり（地域のまつりに参加したことがある）｣｢地域のイベント（地域のイベントに参加したことがある）｣｢イベント手伝い（地域のイベントの手伝いやごみ拾いなどに参加したことがある）｣｢習い事（有料の学習塾やピアノ教室、水泳教室などの習い事に通ったことがある）｣｢アルバイト（アルバイトをしたこと

がある)」と省略する。

表１：小学校から高校までの体験学習と地元就職意識

	地元就職希望:n=727				地元外就職希望:n=313			
	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし
野外キャンプ	71%	32%	16%	24%	69%	34%	22%	22%
仕事調べ	52%	72%	80%	3%	51%	77%	84%	1%
職場見学	54%	82%	34%	3%	54%	77%	31%	4%
職業体験	3%	16%	5%	77%	1%	15%	3%	81%
地域のまつり	88%	63%	49%	6%	91%	65%	45%	5%
地域のイベント	78%	50%	35%	12%	80%	51%	32%	12%
イベント手伝い	62%	42%	25%	19%	64%	39%	19%	20%
習い事	81%	54%	38%	11%	78%	56%	34%	13%
アルバイト	0%	0%	12%	84%	0%	1%	17%	80%

小学校から高校にかけての体験学習と、地元就職意識に関するクロス表が表１に示されている。表から､小学校時代には「野外キャンプ」や「地域のまつり」､「地域のイベント」､「習い事」が多いことがわかる。中学校になると「仕事調べ」や「職場見学」といった仕事に関する体験が中心になり､「野外キャンプ」のような経験は減少する。高校時代には「仕事調べ」の比率は高いものの全体的に各項目の体験比率が減少しており、体験学習のバリエーションが減る傾向にあることが示されている。

表２：比率の差の検定

	小学校	中学校	高校	体験なし
野外キャンプ			地元外***	
仕事調べ		地元外*		地元***
職場見学		地元**		
職業体験	地元***			
地域のまつり				
地域のイベント				
イベント手伝い			地元**	
習い事				
アルバイト	地元*		地元外**	

空欄は差がない
***:1%水準、**:5%水準、*:10%水準で有意

次に、各体験学習について、地元就職志向と地元外就職志向の比率の差の検定を行った。検定の結果が表２に示されている。各セルに記載されたほうが比率が高く、空欄は差がない項目である。地元就職の比率が高い体験学習は中学校の「職場見学」、小学校の「職業

体験」、高校の「イベントの手伝い」、小学校の「アルバイト」であった[1]。また、地元外就職の比率が高い体験学習は高校の「野外キャンプ」と中学校の「仕事調べ」、そして高校の「アルバイト」であった。「仕事調べ」については、小学校から高校にかけて一度も体験しないほうが地元就職が高かった。この結果から、「職場見学」や「職業体験」、「イベントの手伝い」といった活動が地元就職意識を高める一方、「野外キャンプ」や「仕事調べ」、「アルバイト」といった体験は地元外就職志向を高める可能性が示唆された。

表３：就職希望５分類の比率

	青森－青森:n=258				青森以外－青森:n=8				青森－地元外:n=132				青森以外－地元:n=469				青森以外－地元外:n=173			
	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし
野外キャンプ	57%	31%	21%	34%	63%	25%	0%	38%	70%	32%	21%	22%	78%	33%	13%	18%	69%	36%	24%	21%
仕事調べ	50%	71%	83%	3%	50%	75%	100%	0%	52%	76%	82%	0%	53%	72%	78%	3%	51%	77%	84%	1%
職場見学	54%	83%	43%	2%	38%	75%	13%	13%	52%	72%	28%	5%	54%	82%	30%	4%	55%	80%	34%	3%
職業体験	4%	15%	5%	78%	0%	25%	0%	75%	1%	14%	3%	80%	2%	17%	5%	77%	1%	15%	3%	82%
地域のまつり	86%	62%	55%	6%	88%	63%	25%	13%	90%	60%	43%	6%	89%	64%	45%	7%	91%	69%	47%	4%
地域のイベント	76%	51%	41%	12%	75%	63%	13%	25%	76%	46%	33%	14%	79%	49%	31%	13%	83%	54%	32%	10%
イベント手伝い	58%	47%	30%	19%	100%	50%	13%	0%	61%	36%	20%	20%	65%	40%	22%	19%	65%	40%	18%	21%
習い事	76%	49%	34%	15%	88%	75%	38%	0%	74%	52%	23%	17%	83%	57%	40%	8%	81%	59%	42%	11%
アルバイト	0%	1%	15%	81%	0%	0%	0%	88%	0%	1%	17%	80%	0%	0%	11%	86%	0%	1%	18%	80%

次に、就職地の意識について、青森県出身者が青森県を希望するケースを「青森－青森」、青森県外出身者が青森県を希望するケースを「青森以外－青森」、青森県出身者が青森県外を希望するケースを「青森－地元外」、青森県外出身者が地元就職を希望するケースを「青森以外－地元」、青森県外出身者が地元以外を希望するケースを「青森以外－地元外」、の５カテゴリーに細分化し、同様の集計と分析を行った。集計結果が表３に示されている。

まず、青森県出身者と青森県外出身者の地元以外就職希望の比率を比較すると、青森県出身者が約 34％に対して青森県外出身者が約 28％であり、青森県出身者のほうが５％水準で有意に地元以外就職の比率が高かった。次に、青森県内出身者と青森県外出身者の各体験学習の経験比率を比較すると、「野外キャンプ」と「習い事」を小学校から高校を通じて経験していない比率が、青森県出身者のほうが高かった[2]。

[1]ただし、アルバイトについては小学校でアルバイトを体験しているケースは３件しかなく、その全てが地元就職であったため検定上は差が出ているだけであり、実質的な差が存在するかどうかは疑問が残る。この３件のアルバイトについても、小学生ということを考えるとおそらく実家の商店の手伝いや、近隣農家の手伝いのような、いわゆる「アルバイト」とは異なるものでないかと考えられる。

[2]「野外キャンプ」については青森県出身者の約 30％が一度も経験していないのに対し、青森県外出身者の未経験は約 19％であった。また、「習い事」については青森県出身者の約 16％が未経験なのに対し、青森県外出身者の未経験は約 9％であった。

表４：青森県出身者 / 青森県外出身者の就職地志向と体験学習

	青森県出身:n=390				青森県外:n=650			
	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし
野外キャンプ	地元外***			地元***	地元***		地元外***	
仕事調べ				地元***			地元外*	
職場見学		地元***	地元***					
職業体験	地元***							
地域のまつり			地元***					
地域のイベント								
イベント手伝い		地元***	地元***					
習い事			地元***					
アルバイト							地元外***	地元*

空欄は差がない
***:1%水準、**:5%水準、*:10%水準で有意

次に、青森県出身者、青森県外出身者それぞれについて、地元就職志向の差について分析した。結果が表４にまとめられている。青森県出身者と青森県外出身者ではかなり傾向に差がある。青森県出身者については、「職場見学」、「職業体験」、「地域のまつり」、「イベントの手伝い」、「習い事」が地元就職志向を高め、「野外キャンプ」や「仕事調べ」は地元外就職志向を高めている。一方、青森県外出身者については小学校での「野外キャンプ」が地元就職志向を高めるが、高校での「野外キャンプ」や「仕事調べ」、「アルバイト」は地元外就職志向を高める傾向にある。特に、小学校の「野外キャンプ」が青森県出身者と青森県外出身者では逆の傾向を示している点が示された[3]。前述のように、青森県出身者は「習い事」と「野外キャンプ」の経験比率が青森県外出身者に比べると低い。高校で「習い事」を経験すると地元就職志向が高まる傾向にあることと併せて考えると、「習い事」が高校でも行えるということはある程度家庭が裕福な可能性があり、地域に対する不満がなく、ネットワークなども形成されるため地元就職志向が高まっている。しかし、他地域に比べると「習い事」を高い学年まで行わせる金銭的余裕がないのかもしれない[4]。

最後に、地元就職志向と地元外就職志向それぞれについて、青森県出身者と青森県外出身者の比率の比較を行った。結果は表５に示されている。地元就職志向について見てみると、青森県出身者のほうが有意に比率が高かったものは高校の「野外キャンプ」、高校の「職場見学」、小学校の「職業体験」、高校の「地域のまつり」、高校の「地域のイベント」、

[3]なお、今回は青森県外出身者とまとめているが、実際には北海道や東北の他地域、関東など様々なバリエーションがある。更に細かく地域を分ければ、今回は有意な差が見られなかった項目についても何らかの差が生まれる可能性はある。
[4]今回の調査では親の所得について質問していないため、検証は難しい。

表５：地元就職志向と青森県出身者/ 青森県外出身者の傾向の差

	地元就職志向:n=727				地元外就職志向:n=313			
	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし
野外キャンプ	青森外***		青森***	青森***				
仕事調べ								
職場見学			青森***			青森外*		
職業体験	青森*							
地域のまつり			青森***			青森外*		
地域のイベント			青森***					
イベント手伝い	青森外*	青森**	青森**					
習い事	青森外**	青森外**		青森***			青森外***	
アルバイト							青森***	青森***

空欄は差がない
***:1%水準、**:5%水準、*:10%水準で有意

中学・高校での「イベントの手伝い」であった。また、青森県外出身者のほうが有意に比率が高かったものは小学校の「野外キャンプ」､「イベントの手伝い」､小学校･中学校の「習い事」であった。また､「野外キャンプ」と「習い事」については経験しない比率が青森県出身者のほうが高かった。地域外就職志望者については、高校の「アルバイト」の比率は青森県出身者のほうが高く、中学校の「職場見学」、中学校の「地域のまつり」、高校の「習い事」は青森県外出身者のほうが比率が高かった。「アルバイト」については体験なしが青森県出身者のほうが比率が高かった。地域に対する愛着との因果関係の切り分けが難しいところであるが、青森県出身者は高い学年での体験学習が他の地域に比べると地元就職志向を高める傾向にあり、一方で低い学年での体験学習は他地域に比べると地元就職志向を上げていないように思われる。また､「地域のまつり」や「習い事」は他地域に比べると地域外就職志向を下げる傾向にある一方､「アルバイト」に関しては高校で体験をしたり、あるいはずっと体験をしないケースで地元就職志向が青森県では下がる傾向が示された。

ここまでの結果をまとめると、次のことが示唆される。まず、全体の傾向としては「職場見学」や「職業体験」､「イベントの手伝い」といった活動は地元就職志向を高める傾向にある（表２）。この傾向は、青森県出身者について特に顕著である（表４）。特に、地元就職志望者については高校でこうした活動を経験した比率が青森県出身者が高い。一方で、低学年での経験比率は地域外のほうが高い傾向にある（表５）。因果関係については議論の余地が残るが、地域の行事に高校まで継続的に参加してもらうことが、地元就職意欲を高める可能性がある。

3. 地元就職意識と弘前に対する意識との関連

次に、弘前市に対する意識と地元就職志向の関連について分析した。本調査の問 26 では､弘前市に対する意識として５項目についてあてはまらない（１）からあてはまる（５）の５件法で質問している。この回答と地元就職志向の関係を分析する。なお､各項目は｢地域の一員であると感じる（私は地域の一員であると感じる)｣｢地域の将来のことが気になる（私はこの地域の将来のことが、とても気になる)｣｢地域に愛着を感じる（私はこの地域に愛着を感じる)｣｢地域を離れることが困難である（この地域を離れることは、たとえ離れたくても､大変困難である)｣｢地域にいるのは必要だから（現在この地域にいるのは、そうしたいからであると同時に必要だからである)｣と省略する。

表６：地元就職／地元外就職の分布の比較

	あてはまらない⇔あてはまる					
	1	2	3	4	5	独立性の検定
地域の一員であると感じる						
地元	113	163	211	155	85	
地元外	56	80	91	55	31	
地域の将来のことが気になる						
地元	120	174	200	158	75	5%
地元外	57	102	76	59	19	
地域に愛着を感じる						
地元	89	145	178	198	112	
地元外	48	62	89	81	31	
地域を離れることが困難である						
地元	262	180	196	63	26	5%
地元外	141	86	62	18	6	
地域にいるのは必要だから						
地元	60	87	201	239	139	1%
地元外	45	54	97	85	32	

まず、地元就職志向と地元外就職志向の２タイプに分類し、問 26 の各項目について独立性の検定を行った。結果が表６に示されている。独立性の検定の結果､「地域の将来のことが気になる」｢地域を離れることが困難である｣｢地域にいるのは必要だから」の３つの項目については地元就職志向と地元外就職志向で分布に差があることが示された。これら３項目については、いずれも地元就職志向のほうが「あてはまる」の方に分布が偏っている。つまり、地元就職志望者は地元以外就職志望者と比べ、弘前市の将来のことが気になっており、弘前市を離れることが困難で、必要性があって弘前市にいることが示唆されている。

表７：青森県出身 / 青森県外出身の分布の比較

	あてはまらない⇔あてはまる					
	1	2	3	4	5	独立性の検定
地域の一員であると感じる						
青森県出身	31	58	92	114	95	1%
青森県外出身	138	185	210	96	21	
地域の将来のことが気になる						
青森県出身	42	64	95	121	68	1%
青森県外出身	135	212	181	96	26	
地域に愛着を感じる						
青森県出身	32	37	83	129	105	1%
青森県外出身	105	170	184	150	38	
地域を離れることが困難である						
青森県出身	81	110	119	59	21	1%
青森県外出身	322	156	139	22	11	
地域にいるのは必要だから						
青森県出身	26	56	107	133	68	10%
青森県外出身	79	85	191	191	103	

次に、青森県出身者と青森県外出身者で同様の分析を行った。結果は表７に示されている。質問が弘前市に対する項目であることからも予想されたとおり、すべての項目において青森県出身者と青森県外出身者には有意な差があり、青森県出身者の分布のほうが「あてはまる」に偏っている。

表８：青森県出身者の県内就職 / 県外就職の分布の比較

	あてはまらない⇔あてはまる					
	1	2	3	4	5	独立性の検定
地域の一員であると感じる						
県内就職	14	29	62	81	72	1%
県外就職	17	29	30	33	23	
地域の将来のことが気になる						
県内就職	21	32	68	83	54	1%
県外就職	21	32	27	38	14	
地域に愛着を感じる						
県内就職	13	20	51	86	86	1%
県外就職	19	17	32	43	19	
地域を離れることが困難である						
県内就職	39	67	88	46	18	1%
県外就職	42	43	31	13	3	
地域にいるのは必要だから						
県内就職	7	30	63	96	62	1%
県外就職	19	26	44	37	6	

表７の結果をふまえ、青森県出身者についてのみ、地元就職志向か地元外就職志向かの分布の比較を行った[5]。結果は表８に示されている。青森県出身者に絞ったもとでも、県内就職希望者（地元就職志向）と県外就職希望者（地元外就職志向）には差があることがわかる。どの項目についても、県内就職希望者のほうが「あてはまる」の方に分布が偏っており、地域に対する愛着の強い学生が県内就職を希望していることが示されている。

以上の結果から、青森県出身者については地元に対する愛着が強い層が地元での就職を望む傾向が強いことが示唆された。

４．決定木を用いた地元就職志向の決定要因の分析

以上の結果をふまえて、地元就職志向について、決定木を用いて分析を行う。被説明変数を「地元就職志向」「地元外就職志向」の２タイプとし、出身地（q31name）、弘前市に対する態度（q26s １～ q26s ５、各ｓは上述の項目番号に対応）、高校までの体験学習（q16x １ｓ１～ q16x ９ｓ４、各ｘは前述の体験学習の種類を表し、各ｓは体験学年（小学校（１）～高校（３）、体験なし（４））に対応）の３つの要素で決定木を生成した。結果は図１のとおりである。図の四角には上から順にそのノードで多いタイプ、地元以外就職の比率、サンプルに占めるそのノードの割合が記されている。各ノードは下に書かれた項目で分割され、当てはまる場合は左に、あてはまらない場合は右に分類されることになる。

決定木から、地元就職の比率が特に高い（70％以上）のは①中国四国または外国出身以外で、弘前市に住む必要が４（ややあてはまる）以上の学生（該当学生の 77％が地元就職志向）、②出身地が北海道・岩手・宮城・山形・福島・関東甲信・東海北陸のいずれかで、弘前市に住む必要が３（どちらでもない）以下の学生（該当学生の 74％が地元就職志向）、の２タイプに分類される。前節の分析から①が青森県出身者が該当するタイプ、②が青森県外出身者が該当するケースであると考えられる[6]。

---

[5]「地域にいるのが必要だから」の項目については、青森県出身者と青森県外出身者で比較的差が少ない。ただし、弘前大学の学生に対して行ったアンケートであることを踏まえると、弘前大学に通うという必要上、地域外出身者でもあてはまると考えた回答者が多かったためだと思われる。

[6]②で出身地に青森が含まれないのは、青森県出身者で県内就職を志望する学生の多くが弘前市に住む必要が 4 以上のカテゴリーに当てはまるためである（青森県出身者全体の 41％、県内就職志望者の 61％にあたる）。

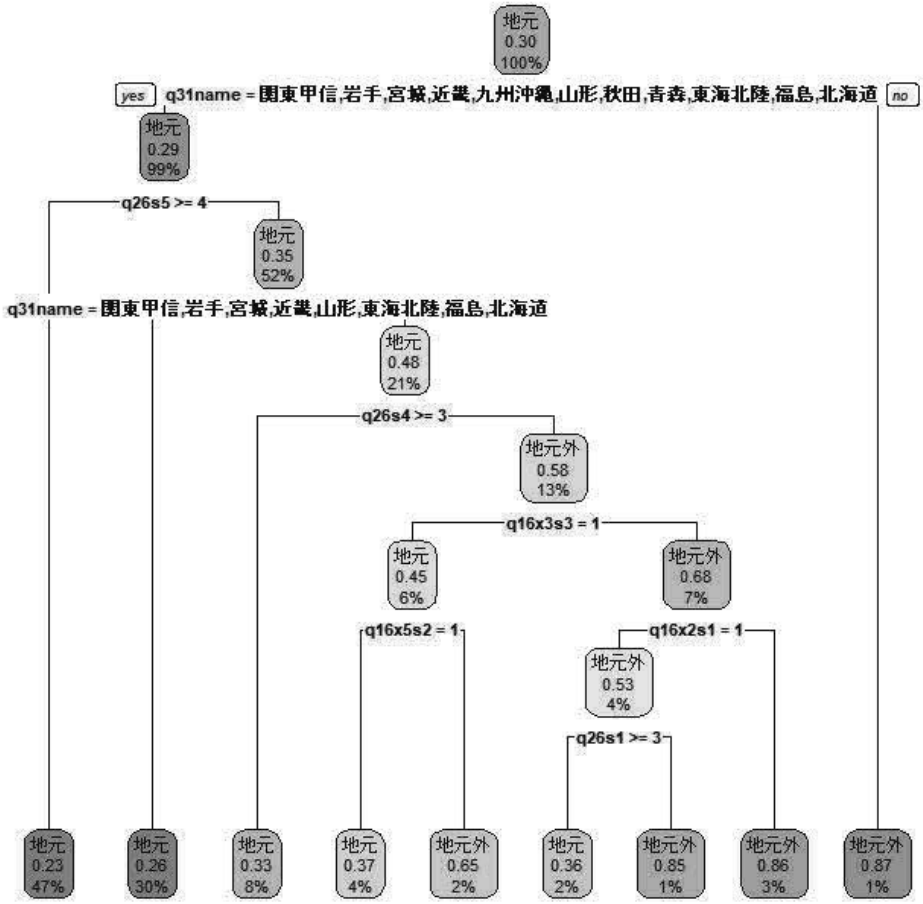

図１：出身地、弘前市に対する態度、高校までの体験学習を用いた決定木

一方、地元外就職志望の比率が特に高い（70％以上）のは、①出身地が中国・四国地方または外国の学生（該当学生の 87％が地元以外就職志望）、②出身地が青森・秋田のいずれかで、弘前市に住む必要性が３（どちらでもない）以下、弘前市を離れることが困難であるが２（あまりあてはまらない）以下、高校で「職業体験」を体験しておらず、小学校で「仕事調べ」を体験していない学生（該当者の 86％が地元外就職志望）、③出身地が青森・秋田のいずれかで、弘前市に住む必要性が３（どちらでもない）以下、弘前市を離れることが困難であるが２（あまりあてはまらない）以下、高校で「職業体験」を体験しておらず、小学校で「仕事調べ」を体験しており、弘前市の一員であると感じるが２（あまりあてはまらない）以下のケース（該当学生の 85％が地元外就職志望）である。①のタイプについては、弘前市からかなり離れた地域から弘前大学を選択しているため、学生にとっての地元（つまり、中国・四国地方や外国）での就職の志望が低いと考えられる。②のタイプの学生については、青森県出身者であっても弘前市に住む必要性があまりないタ

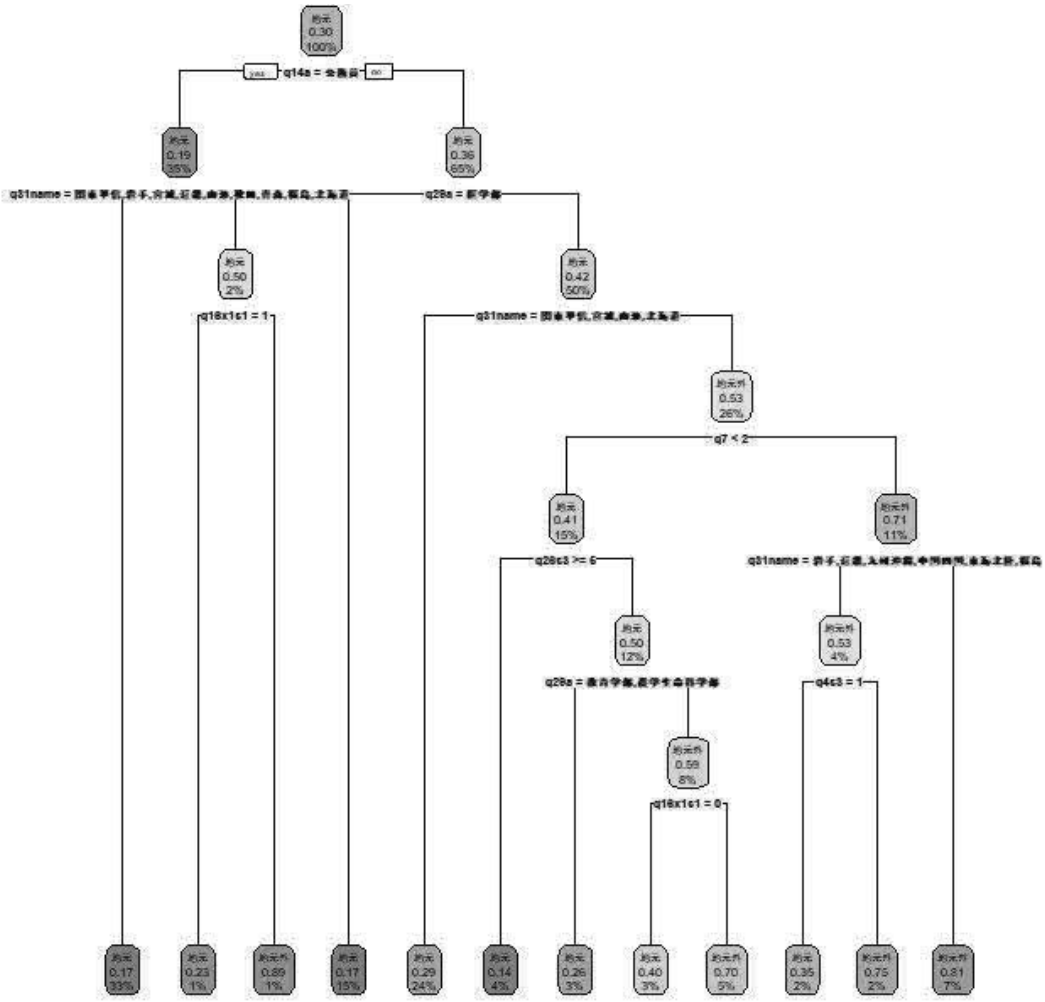

図２：候補となる変数を追加した決定木

イプであると考えられる。また、③のタイプについては弘前市に対して疎外感を感じている（一員でないと感じている）タイプであると考えられる。

以上の結果から、青森県出身者については様々な事情により弘前市に住む必要性がある場合（地元就職志向のタイプ①、地元外就職志向のタイプ②の逆）に地元就職志向が高くなり、一方で弘前市の一員であると感じない場合（地元外就職志向のタイプ③）は地元外就職志向が高まると考えられる。

次に、より広い範囲の変数を加えて、決定木分析を行った。上記の変数に加え、志望職種（q14a)、性別（q28)、所属学部（q29a)、父親が実家のある地域出身（q32)、母親が実家のある地域出身（q33)、大学で身につけたい力（ｑ４ｓ１～ｑ４ｓ６、各ｓは身につけたい力に対応)､弘前大学が第一志望だったかどうか（ｑ７）も含めて決定木を生成した。結果は図２に示されている。

まず、地元就職志向の比率が高い（75％以上）のは、①公務員志望で、出身地が北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島・関東甲信・近畿の学生（該当学生のうち83％が地元就職志向）、②公務員志望で東海北陸・中国四国・外国出身で、小学校で「野外キャンプ」を経験している学生（該当学生の77％が地元就職志向）、③公務員以外志望で医学部の学生（該当学生の83％が地元就職志向）、④公務員以外志望で医学部以外の学部で、弘前大学が第一志望で、弘前市に愛着を感じるが５（とても当てはまる）の学生（該当学生の86％が地元就職志向）、である。出身地の公務員を志望する学生が多いことが示唆されている（タイプ①）。また、医学部については地元に戻りたい意識が強いようにみえる（タイプ③）。弘前大学が第一志望で弘前市に愛着を感じている場合は地元就職志向が高い傾向にあるが、これは地域に愛着を感じているため弘前大学に進学しているケースであると思われる（タイプ④）。

一方、地元外就職志向の比率が高い（75％以上）のは、①公務員志望で東海北陸・中国四国・外国いずれかの出身で、小学校で「野外キャンプ」を経験していない学生（該当学生の89％が地元外就職志向）、②公務員以外志望で医学部以外で、出身地が青森・秋田で、弘前大学が第一志望でない学生（該当学生のうち81％が地元外就職志向）、③公務員以外志望で医学部以外で、出身地が岩手・福島・東海北陸・近畿・中国四国・九州沖縄のいずれかで、大学生活を通じて「自然や社会への洞察を深化させる力」を求めていない学生（該当学生の75％が地元外就職志向）である。タイプ①については、小学校で「野外キャンプ」を体験するかどうかで地元就職を志望する比率が高いか低いかがかなり変わるケースである。公務員志望で東海北陸・中国四国・外国出身の学生は22人おり、地元希望と地元以外希望はちょうど11人ずつである。小学校でキャンプを経験した13人については10人が地元就職を志望しているが、小学校でキャンプを経験していない９人の中では１人だけである。青森県のことではないので本稿の分析の範囲からは少し外れるが、その原因は不明である。タイプ②については、青森・秋田出身でもともと弘前大学が第一志望ではないので地域外に出る意向が強い学生であると考えられる。諸般の事情で弘前大学に進学したが、就職の際に地域外に移動することを考えているのではないか。③については青森県外出身者であり、特に自然への洞察のような青森県に強みのある学習内容に関心がないので、おそらく卒業後は首都圏で働くことを希望しているのではないかと思われる。

以上の内容から、青森県出身者については、公務員志望の学生（タイプ①）や弘前市に愛着があり、弘前大学が第一志望である学生（タイプ④）が地元就職を志望する傾向にあ

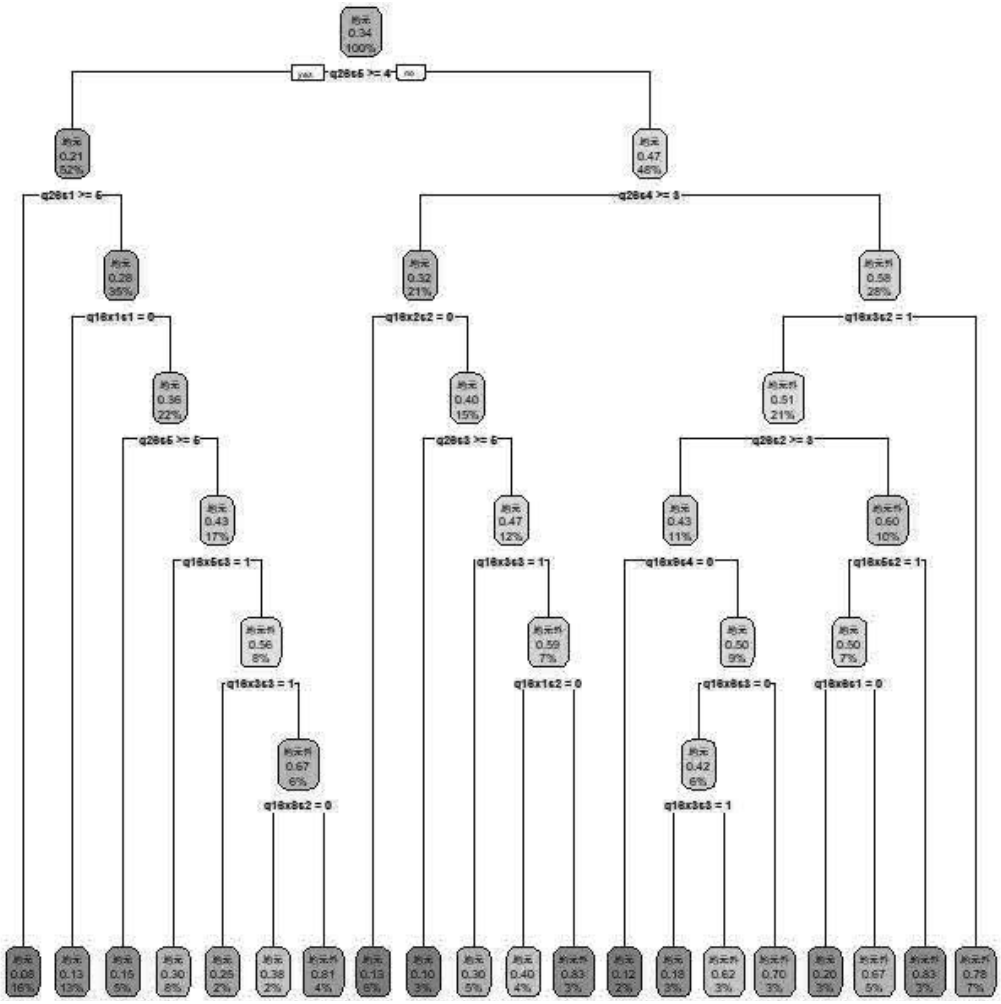

図３：青森県出身学生についての決定木

ることが伺える。一方で、青森県出身者であっても弘前大学が第一志望でなかったケース（タイプ②）については、地元就職の意向が低い傾向にあると考えられる。

こうした点を考察するために、青森県出身者に絞って同様の分析を行った。まず、地元への愛着や体験学習に変数を絞った決定木が図３に示されている。

地元就職志向の比率が特に高く（75％以上）、あてはまる学生が多い（20 人以上）ケースは[7]、①弘前市にいる必要性が４（ややあてはまる）以上で、弘前市の一員であると感じるが５（あてはまる）の学生（該当学生 64 名の 92％が青森県就職志望）、②弘前市にいる必要性が４（ややあてはまる）以上、一員であると感じるが４（ややあてはまる）以

[7] 分岐がかなり多岐にわたるため、もともとの人数が多い地元就職志向については構成グループの人数も加味した。

下で、小学校で「野外キャンプ」を経験していない学生（該当学生 52 名の 87％が青森県就職志望)、③弘前市にいる必要性が５（あてはまる）で、弘前市の一員であると感じるが４（ややあてはまる）以下で、小学校で「野外キャンプ」を経験している学生（該当学生 20 名の 85％が青森県就職志望)、④弘前市にいる必要性が３（どちらでもない）以下、地域を離れるのが困難が３（どちらでもない）以上、中学校で「仕事調べ」を経験していない学生（該当学生 23 名の 87％が青森県就職志望)、であった。必要性が高く愛着もあるケース（タイプ①)、愛着は必ずしも高くないが必要性が高いケース（タイプ②、③)、必要性がないが離れるのが難しく、仕事について調べたことがないケース（タイプ④）と考えられる。

一方､県外就職の意向が特に高い（75％以上）ケースは､①弘前市にいる必要性が４（ややあてはまる)、弘前市の一員であると感じるが４（ややあてはまる）以下、小学校で「野外キャンプ」を経験しており、高校で「地元のまつり」を経験しておらず「職場経験」も経験しておらず、中学校で「習い事」をしていた学生（該当学生 16 名の 81％が県外就職志望)、②弘前市にいる必要性が３（どちらでもない）以下、弘前市を離れることが困難であるが３（どちらでもない）以上、中学校で「仕事調べ」を経験しており、弘前市への愛着が４（ややあてはまる）以下で､高校で「職場見学」を体験しておらず､中学校で「野外キャンプ」を経験した学生（該当学生 12 名のうち 83％が青森県外就職志望)、③弘前市にいる必要性が３（どちらでもない）以下、弘前市を離れるのが困難であるが２（あまりあてはまらない）以下、中学校で「職場見学」を経験して、弘前市の将来が気になるが２（あまりあてはまらない）以下、中学校で「地元のまつり」を経験していない学生（該当学生 12 名のうち 83％が県外就職志望)、④弘前市にいる必要性が３（どちらでもない）以下､弘前市を離れるのが困難が２（あまりあてはまらない）以下で中学校で「職場見学」を経験していない学生（該当学生 27 名のうち 78％が青森県外就職志望)、であった。地域を離れるのが困難だが地域の一員だとは感じておらず、地域のまつりや職場見学など地域と触れ合う機会が少ないケース（タイプ①)、弘前市にいる必要性があまりなく弘前市への愛着が低いケース（タイプ②)、弘前市にいる必要性がなく離れることも可能で地域の将来に関心がないケース（タイプ③、④)、と考えられる。

以上の結果から、県内就職を希望する学生は大きく地元を離れるのが困難なケースと地元に愛着があるケースに分けられ、県内就職を希望しない学生は地域に対して疎外感を感じているケースやとくに地域にこだわりがないケースに分けられることが示唆される。

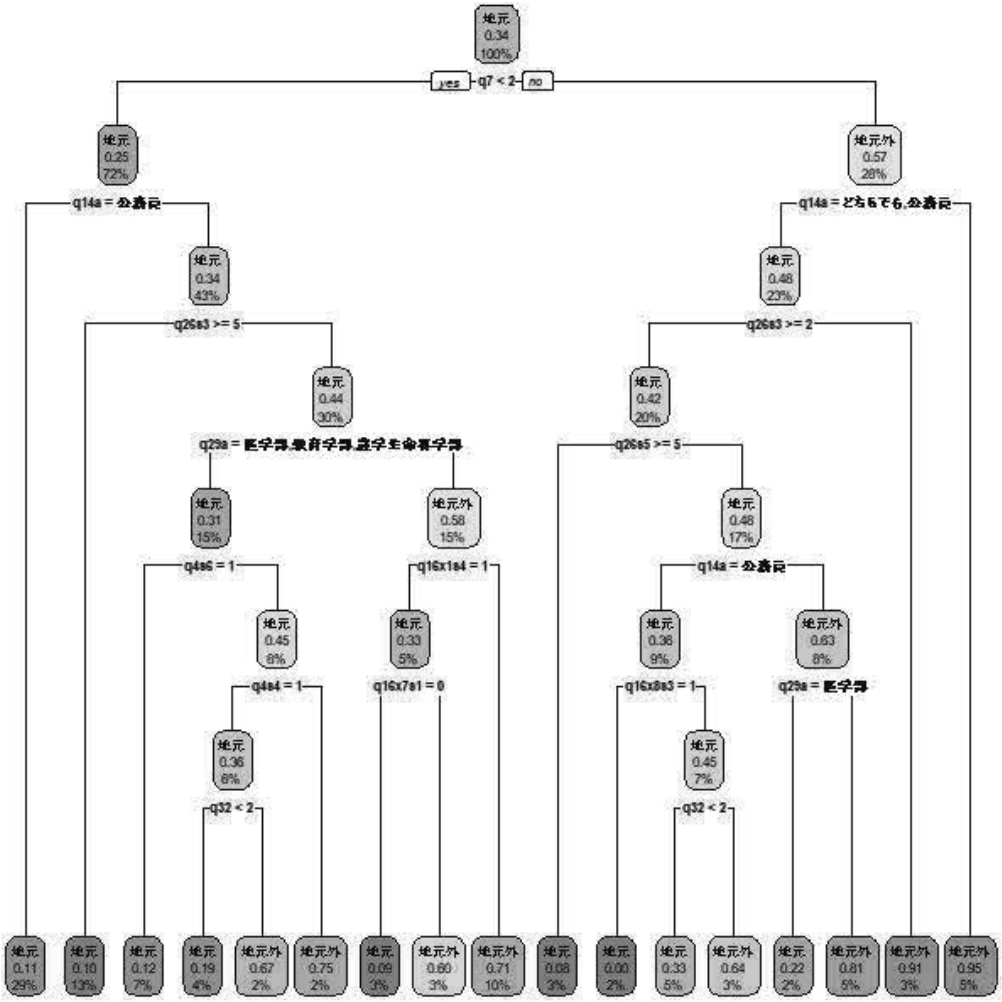

図４：項目を追加した決定木

青森県内の学生に対し、さらに変数を追加して生成した決定木が図４に示されている。

県内就職の志望比率が高く（75％以上）、一定の該当学生がいる（20 名以上）のは、①弘前大学が第一志望で公務員志望の学生（該当学生 113 名の 89％が県内就職志望）、②弘前大学が第一志望で公務員以外志望で、弘前市への愛着が５（とてもあてはまる）の学生（該当学生 49 名の 90％が県内就職志望）、③弘前大学が第一志望で公務員以外志望で、弘前市への愛着が４（ややあてはまる）以下で、医学部・教育学部・農学生命科学部のいずれかに所属しており、「学び続ける力」を期待している学生（該当学生 26 名の 88％が県内就職志望）、であった。基本的に弘前大学を志望している学生は県内就職の志望比率が高く、公務員志望者（タイプ①）は特に高い。民間志望の場合、弘前市への愛着が高い学生（タイプ②）や、教育に期待している学生（タイプ③）は県内就職比率が高いように思われる。

一方、県外就職の志望比率が高い（75％以上）のは、①弘前大学が第一志望ではなく、民間就職を希望する学生（該当学生 21 名の 95％が県外就職志望）、②弘前大学が第一志望ではなく公務員志望または民間か公務員かをまだきめておらず、弘前市に愛着を感じるが１（あてはまらない）の学生（該当学生 11 名のうち、90％が県外就職希望）、③弘前大学が第一志望ではなく、民間か公務員かをまだきめておらず、弘前市に愛着を感じるが２（あまりあてはまらない）以上で、医学部以外の所属の学生（該当学生 21 名のうち 81％が県外就職希望）、④弘前大学が第一志望で公務員以外で、弘前市への愛着が４（ややあてはまる）以下、医学部・教育学部・農学生命科学部のいずれかに所属しており、「学び続ける力」も「専門知識を国際社会や地域社会の問題解決に応用する応用力」もいずれも期待していない学生（該当学生８名のうち 75％が県外就職志望）、であった。弘前大学が第一志望ではなく民間を目指すケース（タイプ①）、弘前市に愛着を感じていないケース（タイプ②）、また進路に迷っているケース（タイプ③）、大学の教育に期待していないケース（タイプ④）で、県内就職志望が低いように思われる。

以上の結果をまとめると、青森県出身者については弘前大学が第一志望である学生、公務員志望である学生、民間志望の場合は弘前市への愛着が強い学生が、県内就職率が高い傾向を示している。一方で、弘前大学が第一志望でない場合や、大学の教育に期待していない場合は、県内就職の意向が低い傾向にあるようである。

今回のアンケートは１年生を対象にしており、４月から５月にかけて行ったものである。そのため、特に青森県出身者については弘前大学を志望したかどうか、つまりある種の不本意入学であるかどうかによってかなり大きく意向が分かれているように見える。弘前大学が国立大学であることを考えると、第一志望でない学生は、青森県外の大学を志望していたが、何らかの事情で弘前大学を選択しており、もともと大学進学の段階で地域外に出ることを検討していたと思われる。とはいえ、いずれにせよ弘前市への愛着が低いと県内就職は行われない傾向にある。

５．アソシエーション分析を利用した弘前市に対する態度と体験学習の関係の考察

ここまでの分析で、やはり弘前市に対する態度や体験学習の経験が就職希望地の決定に大きな影響を与えていることが示唆された。ただし、この２つの要素については何らかの

相関がある可能性がある。そこで、要素の関連に着目するアソシエーション分析を行い、影響について分析した。

分析手法としては大学で学びたいこと６項目、体験学習に関する 36 項目と弘前市に対する態度に関する５項目について、組み合わせとして現れる条件付き確率を計算し、条件をつけない確率（つまり、通常の出現頻度）と比べてどの程度差があるかを見てみる。なお、分析に際しては弘前市に対する態度を４以上と３以下に分けて分析を行っている。表９には、体験学習に関する項目同士以外のもので、サポートが 0.1 より大きいものを、リフトが高かったものから上位 20 組を挙げている[8]。なお、信頼度が高くなる方を条件変数としている。

表から、地域に対する態度同士の影響がかなり強いことが伺える。例えば、地域を離れることが困難な回答者の約 78％は地域の将来が気になっており、その比率は条件をつけ

表９：リフト上位20 の組み合わせ

	条件変数		組合変数	サポート	信頼度	リフト
1	地域を離れることが困難	⇒	地域の将来が気になる	0.159	0.781	1.630
2	地域を離れることが困難	⇒	地域にいる必要がある	0.159	0.781	1.532
3	地域の将来が気になる	⇒	地域の一員であると感じる	0.373	0.779	1.480
4	地域の一員であると感じる	⇒	地域に愛着がある	0.457	0.868	1.442
5	地域を離れることが困難	⇒	地域の一員であると感じる	0.150	0.740	1.405
6	地域の将来が気になる	⇒	地域に愛着がある	0.398	0.831	1.382
7	高度な学識を活かす力	⇒	学び続ける力	0.220	0.612	1.341
8	地域の将来が気になる	⇒	地域にいる必要がある	0.323	0.674	1.323
9	地域を離れることが困難	⇒	地域に愛着がある	0.162	0.795	1.321
10	野外キャンプ（中学校）	⇒	自然や社会への洞察を深化させる力	0.128	0.447	1.283
11	自然や社会への洞察を深化させる力	⇒	多元的に物事の本質を見通す力	0.284	0.816	1.252
12	地域にいる必要がある	⇒	地域に愛着がある	0.370	0.727	1.208
13	地域にいる必要がある	⇒	地域の一員であると感じる	0.320	0.628	1.194
14	地域のイベントの手伝い（高校）	⇒	地域にいる必要がある	0.164	0.608	1.193
15	地域のイベントに参加（高校）	⇒	地域にいる必要がある	0.228	0.607	1.192
16	自然や社会への洞察を深化させる力	⇒	学び続ける力	0.189	0.544	1.191
17	野外キャンプ（中学校）	⇒	高度な学識を活かす力	0.123	0.427	1.189
18	野外キャンプ（高校）	⇒	学び続ける力	0.109	0.542	1.186
19	地域を離れるのが困難	⇒	専門知識を国際社会や地域社会の問題解決に応用する応用力	0.139	0.685	1.171
20	自然や社会への洞察を深化させる力	⇒	専門知識を国際社会や地域社会の問題解決に応用する応用力	0.237	0.680	1.162

[8] サポートはその２つの組み合わせが全体の中で発生する比率を表す。信頼度は条件変数に該当する観測対象のうち、組み合わせ変数にも該当したものの比率を表す。リフトは、条件変数の条件をつけた場合とつけない場合で、組み合わせ変数が発生する比率がどれだけ変化するかを表す。例えば、１つ目については「地域を離れることが困難」と「地域の将来が気になる」の両方に当てはまる回答者が全体の約 16％であり、「地域を離れることが困難」にあてはまる回答者のうち約 78％は「地域の将来が気になる」にもあてはまる。そして、「地域を離れることが困難」な回答者という条件をつけると、条件をつけない場合と比べて「地域の将来が気になる」割合が 1.63 倍になる。一般にサポートが大きいものは組み合わせの頻度が高く、信頼度が高いものは条件変数のもとで組み合わせ変数の重要度が高く、リフトが高いものは組み合わせとしての結びつきが強いことを示唆している。信頼度以外は条件変数と組み合わせ変数を逆にしても数値はおなじになる。

ない場合の約 1.6 倍である。また、体験学習との関連を見ると、野外キャンプは期待する大学での学びと、地域のイベントへの手伝いや参加は地域にいる必要性と、それぞれ結び付きが強いことが示唆されている。

同じ系列同士の結びつきが強いため、違う系列との結びつきに限定して、それぞれリフトの上位 10 組を抽出した。まず、表 10 には体験学習との結びつきを示している。

表 10：体験学習に関連する項目

	条件変数		組合変数	サポート	信頼度	リフト
1	野外キャンプ（中学校）	⇒	自然や社会への洞察を深化させる力	0.128	0.447	1.283
2	地域のイベントの手伝い（高校）	⇒	地域にいる必要がある	0.164	0.608	1.193
3	地域のイベントに参加（高校）	⇒	地域にいる必要がある	0.228	0.607	1.192
4	野外キャンプ（中学校）	⇒	高度な学識を活かす力	0.123	0.427	1.189
5	野外キャンプ（高校）	⇒	学び続ける力	0.109	0.542	1.186
6	職場見学（高校）	⇒	学び続ける力	0.201	0.529	1.159
7	地域のイベントの手伝い（高校）	⇒	自然や社会への洞察を深化させる力	0.109	0.402	1.155
8	自然や社会への洞察を深化させる力	⇒	関心を持った仕事について調べる（小学校）	0.198	0.568	1.146
9	自然や社会への洞察を深化させる力	⇒	地域のイベントに参加（中学校）	0.192	0.552	1.139
10	自然や社会への洞察を深化させる力	⇒	地域のお祭に参加（高校）	0.201	0.576	1.136

上位 10 組については、地域に対する態度と関連が強いものが２パターンで、学習に対する態度と関連するものが８パターンであった。地域に対する態度はいずれも「地域にいる必要がある」との結びつきだった。学習については「自然や社会への洞察を深化させる力」との関連が強いようだ。

表 11：地域に対する態度と関連する項目

	条件変数		組合変数	サポート	信頼度	リフト
1	地域のイベントの手伝い（高校）	⇒	地域にいる必要がある	0.164	0.608	1.193
2	地域のイベントに参加（高校）	⇒	地域にいる必要がある	0.228	0.607	1.192
3	地域を離れるのが困難	⇒	専門知識を国際社会や地域社会の問題解決に応用する応用力	0.139	0.685	1.171
4	地域にいる必要がある	⇒	専門知識を国際社会や地域社会の問題解決に応用する応用力	0.337	0.661	1.130
5	地域のイベントに参加（高校）	⇒	地域の将来が気になる	0.203	0.541	1.129
6	地域の将来が気になる	⇒	関心のある仕事について調べる（小学校）	0.267	0.558	1.126
7	地域にいる必要がある	⇒	地域のイベントの手伝い（小学校）	0.337	0.661	0.125
8	習い事（高校）	⇒	地域の将来が気になる	0.162	0.537	0.121
9	自然や社会への洞察を深化させる力	⇒	地域の将来が気になる	0.187	0.536	1.119
10	自然や社会への洞察を深化させる力	⇒	地域に愛着を感じる	0.234	0.672	1.117

表 11 は、地域に対する態度と関連するもののリフトの上位 10 組を示している。上位 10 組のうち、６つが体験学習と、４つが学習に対する期待と関連が強かった。また、体験学習としては「地域のイベントへの参加」や手伝いの結びつきが強かった。また、必要性や将来性に関する態度が、他の項目と結びつきやすいようである。

表 12：期待する学習と関連の強い項目

	条件変数		組合変数	サポート	信頼度	リフト
1	野外キャンプ（中学校）	⇒	自然や社会への洞察を深化させる力	0.128	0.447	1.283
2	野外キャンプ（中学校）	⇒	高度な学識を活かす力	0.123	0.427	1.189
3	野外キャンプ（高校）	⇒	学び続ける力	0.109	0.542	1.186
4	地域を離れるのが困難	⇒	専門知識を国際社会や地域社会の問題解決に応用する応用力	0.139	0.685	1.171
5	職場見学（高校）	⇒	学び続ける力	0.201	0.529	1.159
6	地域のイベントの手伝い（高校）	⇒	自然や社会への洞察を深化させる力	0.109	0.402	1.155
7	自然や社会への洞察を深化させる力	⇒	関心を持った仕事について調べる（小学校）	0.198	0.568	1.146
8	自然や社会への洞察を深化させる力	⇒	地域のイベントに参加（中学校）	0.192	0.552	1.139
9	自然や社会への洞察を深化させる力	⇒	地域のお祭に参加（高校）	0.201	0.576	1.136
10	地域にいる必要がある	⇒	専門知識を国際社会や地域社会の問題解決に応用する応用力	0.337	0.661	1.130

表 12 は、期待する学習と関連が強いもののうちリフトの上位 10 組を示している。体験学習と関連するものが８組、地域に対する態度に関連するものが２つであり、体験学習と期待する学習のあいだにはある程度の関連性がある可能性がある。

以上の分析から、これらの項目は互いに関連性を持つが、基本的には同じ系列の結び付きが強いこと、体験学習と期待する学習内容の結び付きが強いこと、体験学習と地域に対する態度の結びつきは愛着を増すよりは地域にいる必要性や地域の将来性に対する関心とのほうが関連が高いように思えることがわかった。

なお、信頼度の計算の便宜上、条件変数と組合変数としているが、アソシエーション分析は基本的に関連性の指標であり、因果関係を示すものではない点に注意が必要である。信頼度も因果の向きを検証するものではなく、条件変数に該当する回答者に占める組合変数の比率を表したものである。

６．まとめ

本章では、地元就職に対する志向を軸として、様々な分析を行った。まず、職場見学や職業体験、地元のイベントへの参加といった体験学習が、地元就職に対する志向を高めることが示唆された。また、野外キャンプや関心を持つ仕事の調査、アルバイトといった経験は地元外への就職の志向を高める可能性が示唆された。次に、青森県出身者については職場見学や職業体験、地域のイベントへの参加や手伝いが県内就職の志望を高め、青森県外出身者とは傾向が異なる可能性が示唆された。特に、他地域と比べると高校時代の地元の行事への参加が地元就職の志向を高めている可能性が示唆された。決定木を用いて地元就職の志向をさらに細分化した分析では、青森県出身者で県内就職を希望する学生には、地域から離れることが困難なタイプ、地域に愛着があるタイプ、公務員志望のタイプ、弘前大学が第一志望であるタイプ、大学での学びにある程度期待しているタイプが存在する

ことが示唆された。一方で、地域を離れることが比較的容易なタイプや地域から疎外感を感じているタイプで、民間志望であったり弘前大学が第一志望でない場合には、県外就職の志向が高まることが示された。アソシエーション分析の結果から、体験学習と地域に対する態度の間には一定の関連はあるが強い関連は見られなかったため、体験学習を通した影響と地域に対する態度に対する影響はある程度別の経路から及ぼされている可能性が示唆される。

ただし、アンケート調査は４月から５月にかけて行われており、回答者は１年生である。そのため、特に第一志望でなかった場合には全体的に意欲が低下している可能性がある。大学における活動の影響については、今後の調査結果と併せて考える必要がある。

第５章　体験学習と課外活動の関係の分析

花　田　真　一

１．はじめに

本章では、体験学習がボランティアやアルバイト、サークル活動といった課外活動にどのような影響を与えるかについて分析を行う。いわゆる「勉強」を超えた体験学習は、地域との関わりや職業に対する関心の養成などを通じて社会性や協調性を育み、利他的な活動に影響を与える可能性が指摘されている。また、高校までと異なり大学はカリキュラムの自由度が高いため、講義以外の時間をどのように使うかという点が重要になる。本調査では震災に関するボランティア、より包括的なボランティア活動の経験、大学入学後のアルバイトの状況、サークル等の活動の状況について質問している。こうした項目と体験学習の関係を通じて、大学入学以前の体験が、課外活動に与える影響について考察する。

２．体験学習と震災ボランティアの関係

まず、体験学習と震災ボランティアの関係について分析を行う。震災が発生したのは2011年３月であり、2019年４月入学の学生は、現役生については当時小学４年生（４月から小学５年生に進級した）であった。したがって、１年浪人した学生までは震災後の少なくとも１年間は小学生として過ごしたことになる。そこで、まずは小学生のときの学習体験と震災関連のボランティア活動の関係について分析を行った[1]。震災関連のボランティアについては本調査の問17で、東日本大震災から現在までに行った項目７つ（行わなかったも含めて８つ）について、複数回答可でたずねている。各項目については以下では「情報収集（震災に関する情報を積極的に集めた）」「連絡（被災地の家族･親戚、友人･知人に連絡をとった）」「募金・寄付（募金・寄付を行った）」「産品購入（被災地の食品・物産､支援グッズなどを購入した）」「物資提供（物資を送ったり､団体に提供したりした）」「旅行（旅行で被災地に行った）」「ボランティア（震災にかかわるボランティア活動を行った）」「なし（この中に、おこなったことは１つもない）」と表記する。

[1] 本来は学年によって分けるべきであるが、今回の調査では生年や現役 / 浪人についての質問は行っていない。今後の課題となる。

表１：小学生のときの体験学習と震災に関するボランティア活動

	震災ボランティア								
	情報収集	連絡	募金・寄付	産品購入	物資提供	旅行	ボランティア	なし	該当数
野外キャンプ	30.3% 74.3%	20.1% 76.4%	51.5% 72.8%	10.9% 71.1%	5.4% 70.2%	15.7% 77.5%	8.2% 70.9%	18.8% 60.1%	743 70.1%
仕事調べ	34.0% 61.4%	19.0% 53.3%	53.6% 55.7%	13.2% 63.2%	6.8% 64.9%	15.2% 55.0%	9.1% 58.1%	18.1% 42.5%	547 51.6%
職場見学	31.5% 59.7%	19.9% 58.5%	52.8% 57.6%	11.1% 56.1%	6.8% 68.4%	14.8% 56.3%	8.9% 59.3%	17.9% 44.2%	574 54.2%
職業体験	22.7% 1.7%	9.1% 1.0%	31.8% 1.3%	13.6% 2.6%	0.0% 0.0%	31.8% 4.6%	13.6% 3.5%	40.9% 3.9%	22 2.1%
地域のまつり	28.8% 89.4%	18.6% 89.7%	49.8% 89.0%	10.4% 86.0%	5.5% 91.2%	14.9% 92.7%	8.1% 88.4%	21.8% 88.0%	940 88.7%
地域のイベント	29.4% 80.9%	19.2% 82.1%	51.6% 81.7%	11.2% 81.6%	6.0% 87.7%	14.6% 80.8%	9.2% 89.5%	20.0% 71.7%	833 78.6%
イベント手伝い	29.6% 65.3%	19.9% 68.2%	54.3% 69.0%	12.6% 73.7%	6.7% 78.9%	13.2% 58.3%	10.6% 82.6%	18.8% 54.1%	869 63.1%
習い事	29.1% 81.2%	19.3% 83.6%	52.0% 83.5%	11.1% 82.5%	5.9% 87.7%	14.8% 82.8%	8.5% 83.7%	20.1% 73.0%	845 79.7%
該当者数	303 28.6%	195 18.4%	526 49.6%	114 10.8%	57 5.4%	151 14.2%	86 8.1%	233 22.0%	1060

表１には、全回答者についての各項目の割合が示されている。なお、数値については上段が各体験学習体験者に占める各震災関連ボランティア活動経験者の割合（すなわち、横比率)、下段が各震災関連ボランティア活動経験者に占める各体験学習体験者の割合（すなわち、縦比率）を表している[2]。

まず、震災に関するボランティア活動としては募金・寄付が最も多く半数弱の回答者が経験している。ついで震災に関する情報収集が多く、約 29％の回答者が経験していた。一方で、何も行っていないという回答も約 22％あった。

まず、体験学習の観点から見てみると、「仕事調べ」「習い事」「職場見学」といった項目が特徴的な分布を示している。「仕事調べ」を行った回答者は全体と比較して「情報収集」「被災地の産品の購入」「物資の提供」を行っている比率が高い。小学校の段階で関心のある仕事について調べるという体験学習を行っている学校は、調査系の体験学習を積極的に行っている可能性があり、情報収集や、それに基づいた産品の購入、物資の提供といった活動につながった可能性がある。「習い事」を行った回答者は全体と比較して「募金･寄付」「産品の購入」「物資の提供」「ボランティア活動」の比率が高い。小学校で習い事を行っている家庭は比較的家計に余裕があり、金銭的支援の比率が高い可能性がある。また、習

[2]例えば「野外キャンプ」と「情報収集」の項目についてみると、小学生のときに「野外キャンプ」を体験した回答者の約 30％が震災に関する情報収集を行っていること、また震災に関する情報収集を行った回答者の約 74％は小学生のときに「野外キャンプ」を体験していることを表している。

い事によるネットワークが、団体でのボランティア活動に参加しやすくなった可能性がある。「職場見学」を体験した回答者は「物資の提供」を行う比率が高く、「なし」の比率が低い傾向にある。この要因については今後の検証が必要であろう。

次に、震災関連ボランティア活動の観点から見てみると、「情報収集」「募金･寄付」「ボランティア活動」という項目の分布に特徴があるように思われる。「情報収集」については、「仕事調べ」や「職場見学」を行った回答者の比率が高くなっている。小学校で調査系の体験学習を重視する学校の特徴が現れているように思われる。「募金･寄付」については、「仕事調べ」や「習い事」を経験した回答者の比率が高くなっている。前述のように、習い事を行う事ができる世帯は家計に余裕がある可能性が示唆されている。また、「ボランティア活動」については「習い事」や「地域のイベントの手伝い」を経験した回答者の比率が高くなっている。習い事や地域のイベントはいずれもネットワーク形成の効果があり、ボランティア活動につながっている可能性がある。

なお、全体的な分布の均一性について、独立性の検定を行い確認した。結果は５％水準で独立性の帰無仮説は棄却された。つまり、すべての項目に全く関連性がない可能性は低いことが示されている。

ただし、震災に関連するボランティアについては、出身地が一定の影響を与える可能性が考えられる。特に「なし」、すなわちボランティア活動を全く行わなかったという回答は、出身地が東北地方かそれ以外かでかなり差が出ると考えられる。そこで、出身地を「東北地方（青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島）」と「それ以外」に分けて同様の分析を行った。まず、東北地方の結果が表２に示されている。

東北地方出身者に限定すると、「募金･寄付」を経験した回答者は半分以上になっており、情報収集の割合も約 31％と全体と比べるとかなり多くなっている。また、「被災地の親類や知人と連絡をとった」割合も約 22％と多くなっており、まったくボランティアを体験しない比率は約 19％とかなり下がっている。

まず、体験学習の観点から見てみると、「イベントの手伝い」と「野外キャンプ」が特徴的な傾向を示している。「イベントの手伝い」を経験した回答者は、「ボランティア活動」の比率が高くなっており、「なし」の比率が低くなっている。被災地域が含まれることを考えると、地域のイベントの手伝いを行うような体験は、直接的なボランティア活動等の行動につながっている可能性がある。また、「野外キャンプ」についてもボランティアに参加しない比率が下がる傾向が見て取れる。積極的に野外で活動した経験は、被災地におけるボラン

表２：体験学習と震災ボランティア（東北地方）

	震災ボランティア								
	情報収集	連絡	募金・寄付	産品購入	物資提供	旅行	ボランティア	なし	該当数
野外キャンプ	33.9%	25.4%	54.5%	13.3%	5.5%	18.6%	11.1%	14.1%	398
	71.8%	74.3%	69.8%	69.7%	64.7%	75.5%	71.0%	49.6%	65.4%
仕事調べ	35.9%	23.6%	55.3%	15.2%	6.8%	17.5%	11.3%	14.6%	309
	59.0%	53.7%	55.0%	61.8%	61.8%	55.1%	56.5%	39.8%	50.7%
職場見学	33.7%	24.0%	54.4%	12.8%	7.3%	16.7%	10.9%	15.2%	329
	59.0%	58.1%	57.6%	55.3%	70.6%	56.1%	58.1%	44.2%	54.0%
職業体験	16.7%	5.6%	33.3%	16.7%	0.0%	33.3%	16.7%	38.9%	18
	1.6%	0.7%	1.9%	3.9%	0.0%	6.1%	4.8%	6.2%	3.0%
地域のまつり	31.8%	22.5%	50.4%	11.9%	5.8%	17.1%	10.0%	18.8%	538
	91.0%	89.0%	87.1%	84.2%	91.2%	93.9%	87.1%	89.4%	88.3%
地域のイベント	32.2%	22.9%	52.0%	12.7%	6.4%	16.6%	11.4%	17.5%	481
	82.4%	80.9%	80.4%	80.3%	91.2%	81.6%	88.7%	74.3%	80.0%
イベント手伝い	32.3%	24.5%	55.3%	14.7%	6.7%	15.2%	12.9%	15.2%	387
	66.5%	69.9%	68.8%	75.0%	76.5%	60.2%	80.6%	52.2%	63.5%
習い事	30.9%	23.8%	54.3%	13.4%	6.2%	16.8%	10.9%	15.3%	470
	77.1%	82.4%	82.0%	82.9%	85.3%	80.6%	82.3%	63.7%	77.2%
該当者数	303	195	526	114	57	151	86	233	609
	30.9%	22.3%	51.1%	12.5%	5.6%	16.1%	10.2%	18.6%	

ティア活動に繋がりやすい可能性がある。

また、ボランティア活動の観点から見ると、「なし」の比率に特徴があり、該当者の少ない「職業体験」と 0.2％程度高い「地域のまつり」以外の項目は、軒並み低くなっている。これは、体験学習を全く行っていない回答者が母数に含まれているためであり、何らかの体験学習を行った場合、ボランティア活動に参加する比率が高まっている可能性を示唆している。

ただし、独立性の検定を行ったところ、有意な結果は得られなかった。つまり、体験学習とボランティア活動には関連がない可能性も否定できない。

表３には、東北地方以外の出身者について同様の分析の結果が示されている。全体の傾向として募金・寄付が最も多いこと、その次に情報収集が多いことについては表１の結果と変わらない。一方で、「なし」の比率が約 27％と高く、ボランティア活動への参加が約５％と低くなっているが、こうした点は被災地から地理的に離れていることが影響していると考えられる。

体験学習の観点からは、「仕事調べ」「イベントの手伝い」「職場見学」といった項目が特徴的である。「仕事調べ」については「情報収集」や「産品の購入」の比率が高い。調べ学習の一環として情報収集が行われ、それが被災地の産品の購入につながった可能性がある。「イベントの手伝い」については、「ボランティア活動」や「物資の提供」の比率が高まっている。これについては利他的精神が高まった可能性もあるが、地域イベントとし

表３：体験学習と震災ボランティア（東北地方以外）

	震災ボランティア								
	情報収集	連絡	募金・寄付	産品購入	物資提供	旅行	ボランティ	なし	該当数
野外キャンプ	26.0% 80.7%	13.9% 85.5%	48.7% 78.6%	7.7% 78.8%	5.3% 81.8%	12.4% 80.8%	4.7% 76.2%	24.2% 69.5%	339 77.2%
仕事調べ	30.7% 65.1%	13.0% 54.5%	51.5% 56.7%	9.5% 66.7%	6.5% 68.2%	12.6% 55.8%	6.1% 66.7%	22.5% 44.1%	231 52.6%
職場見学	28.0% 61.5%	14.2% 61.8%	51.5% 58.6%	7.9% 57.6%	6.3% 68.2%	12.1% 55.8%	5.9% 66.7%	21.8% 44.1%	239 54.4%
職業体験	50.0% 1.8%	25.0% 1.8%	25.0% 0.5%	0.0% 0.0%	0.0% 0.0%	25.0% 1.9%	0.0% 0.0%	50.0% 1.7%	4 0.9%
地域のまつり	24.2% 87.2%	13.0% 92.7%	49.4% 92.4%	7.6% 90.9%	5.1% 90.9%	12.0% 90.4%	4.8% 90.5%	26.0% 86.4%	393 88.5%
地域のイベント	24.8% 78.0%	13.4% 83.6%	51.3% 83.8%	7.9% 81.8%	5.2% 81.8%	12.0% 78.8%	5.5% 90.5%	23.9% 69.5%	343 78.1%
イベント手伝い	25.5% 64.2%	12.8% 63.6%	53.3% 69.5%	8.0% 66.7%	6.6% 81.8%	10.2% 53.8%	6.9% 90.5%	23.7% 55.1%	274 62.4%
習い事	26.4% 89.0%	12.8% 85.5%	48.8% 85.2%	7.4% 81.8%	5.4% 90.9%	12.3% 86.5%	4.9% 85.7%	26.4% 82.2%	367 83.6%
該当者数	109 24.8%	55 12.5%	210 47.8%	33 7.5%	22 5.0%	52 11.8%	21 4.8%	118 26.9%	439

て被災地支援などが行われた可能性もある。「職場見学」については、全体的な分布のズレはあまりないが、「なし」の比率が下がっている。

ボランティア活動の観点からは、「情報収集」「ボランティア活動」「募金･寄付」といった項目に特徴がある。「情報収集」を行った回答者は「仕事調べ」を体験している傾向にあり、「ボランティア活動」を行った回答者は「イベントの手伝い」を体験している傾向にあり、「募金・寄付」を行った回答者はやはり「イベントの手伝い」を行っている。

なお、独立性の検定の結果は有意ではなかった。

以上の結果から、次のことが示唆される。体験学習が震災ボランティアに影響を与える経路としては、調べ物と地域のイベントがあるように思われる。調べ物学習を行う小学校はその一環として仕事について調べたり、震災について調べたりする割合が高い可能性があり、その結果、被災地の産品の購入といった行動につながっているのかもしれない。また、地域のイベントに参加した場合、ボランティア活動や物資の提供など、物理的な支援につながる傾向にある。このとき、被災地域に近い地域では直接的なボランティア活動が多く、被災地域外では復興イベントなどを通じた活動が行われている可能性も含めて物資の提供の比率が高まっている。また、被災地域については何らかの体験学習を経験することで、「何もアクションを起こさない」という比率が下がっているように思われる。被災地域では体験学習や地域の行事を通じてネットワークが形成され、何らかのボランティア活動につながっているのではないか。また、地域別に分けると極端な差は出なかったが、習い事を行っている場合、金銭的・物質的支援の比率が高い傾向にある。これは、本人の志向が変化す

るというよりは、家計の余裕を反映している可能性がある。

３．体験学習とより広いボランティア活動

次に、体験学習と震災に限定しないボランティア活動の関係について分析する。本調査では問 19 において、行ったことがあるボランティア活動について６つのタイプに分類してたずねている。以下では６つのタイプを「福祉関連（福祉に関係した活動（高齢者施設や福祉施設など））」「子供関連（子どもに関係した活動）」「スポーツ文化（スポーツ･文化･芸術･学術に関係した活動）」「まちづくり（まちづくり･生活に関連した活動）」「環境（環境に関連した活動）」「国際（国際協力に関連した活動）」とする[3]。また、これら全てを経験していない回答者は「なし」とした。また、震災関連については震災に近い小学校に限定したが、今回は各学校における体験学習それぞれについて分析した[4]。

小学校のときの体験学習とボランティア活動に関する結果が表 5.4 に示されている。なお、前節の表と同様、上段に各体験学習体験者にしめる各ボランティア活動体験者の割合

表４：小学校の体験学習とボランティア活動

	福祉関連	子供関連	スポーツ文化	まちづくり	環境	国際	なし	該当数
野外キャンプ	29.2%	28.3%	16.2%	26.6%	36.9%	4.2%	21.3%	743
	72.8%	74.5%	72.7%	75.3%	69.0%	67.4%	70.2%	70.1%
仕事調べ	33.8%	29.3%	18.3%	27.4%	39.5%	5.1%	17.9%	547
	62.1%	56.7%	60.6%	57.0%	54.4%	60.9%	43.6%	51.6%
職場見学	30.8%	30.0%	19.0%	26.1%	38.5%	4.0%	19.3%	574
	59.4%	61.0%	66.1%	57.0%	55.7%	50.0%	49.3%	54.2%
職業体験	36.4%	27.3%	27.3%	36.4%	59.1%	9.1%	4.5%	22
	2.7%	2.1%	3.6%	3.0%	3.3%	4.3%	0.4%	2.1%
地域のまつり	29.3%	28.0%	16.5%	25.0%	38.5%	4.5%	20.2%	940
	92.3%	93.3%	93.9%	89.4%	91.2%	91.3%	84.4%	88.7%
地域のイベント	31.2%	28.5%	17.2%	27.0%	38.5%	4.7%	18.4%	833
	87.2%	84.0%	86.7%	85.6%	80.9%	84.8%	68.0%	78.6%
イベント手伝い	32.0%	30.0%	18.5%	28.3%	42.0%	4.6%	15.4%	669
	71.8%	71.3%	75.2%	71.9%	70.8%	67.4%	45.8%	63.1%
習い事	28.8%	27.8%	17.3%	25.3%	38.0%	4.5%	20.4%	845
	81.5%	83.3%	88.5%	81.4%	80.9%	82.6%	76.4%	79.7%
該当者数	298	282	165	263	397	46	225	1060
	28.1%	26.6%	15.6%	24.8%	37.5%	4.3%	21.2%	

[3]なお、調査においては７つ目の項目として「その他」があり、自由記入となっている。これについては分類が難しいため、項目とはしなかったが、「なし」からは除いている。
[4]震災ボランティアも、時期は限定していないため、中学校や高校における体験学習が影響を与えた可能性があるが、特に募金や物資の提供、ボランティア活動などは震災に近接した時期に集中している可能性が一定以上であるため、小学校に絞って分析した。

（すなわち、横比率）、下段に各ボランティア活動体験者にしめる各体験学習体験者の割合（すなわち、縦比率）を示している。

まず、ボランティア活動の比率について見てみると、「環境に関連した活動」が最も多く約 38％の回答者が体験している。ついで福祉関連、子供関連と続いており、その一方で全くボランティア活動を体験していない回答者も約 21％存在している。

体験学習の観点から見てみると、「イベントの手伝い」と「仕事調べ」といった項目が特徴的である。「イベントの手伝い」を行った回答者は、「なし」の比率が低く、「国際関連」以外の項目はかなり高い傾向にある。また､「仕事調べ」を行った回答者は「福祉関連」の比率が高く、「なし」の比率が低い傾向にある。

ボランティア活動の観点から見てみると、「福祉関連」と「スポーツ・文化」関連に特徴がある。「福祉関連」については「仕事調べ」「地域のイベント」「イベントの手伝い」の比率が高くなっている。「スポーツ・文化」関連については、「職場見学」「イベントの手伝い」「仕事調べ」の比率が高くなっている。また、「なし」については「イベント手伝い」「地域のイベント」「仕事調べ」を行うと比率が低いように見える。

また、独立性の検定の結果、帰無仮説は１％水準で棄却された。つまり、小学校のときの体験学習とボランティア活動には何らかの関連がある可能性が示唆される。

次に、中学校のときの体験学習とボランティアの関係が表５に示されている。体験学習の観点から見てみると、「イベント手伝い」と「地域のイベント」に特徴が見られる。「イ

表５：中学校の体験学習とボランティアの関係

	福祉関連	子供関連	スポーツ文化	まちづくり	環境	国際	なし	該当数
野外キャンプ	33.3% 38.6%	29.9% 36.5%	18.8% 39.4%	28.4% 37.3%	37.4% 32.5%	6.1% 45.7%	21.4% 32.9%	345 32.5%
仕事調べ	30.5% 79.2%	28.1% 77.3%	17.5% 82.4%	25.2% 74.1%	38.1% 74.3%	4.4% 73.9%	21.0% 72.4%	775 73.1%
職場見学	27.5% 78.9%	28.1% 85.1%	16.8% 86.7%	24.7% 80.2%	39.4% 84.6%	4.3% 80.4%	21.1% 80.0%	853 80.5%
職業体験	41.0% 22.8%	32.5% 19.1%	20.5% 20.6%	31.9% 20.2%	43.4% 18.1%	4.8% 17.4%	13.3% 9.8%	166 15.7%
地域のまつり	30.2% 68.8%	30.3% 73.0%	18.9% 77.6%	25.5% 65.8%	42.1% 72.0%	4.7% 69.6%	19.9% 60.0%	679 64.1%
地域のイベント	33.9% 60.7%	33.3% 63.1%	21.3% 69.1%	30.1% 61.2%	44.4% 59.7%	6.0% 69.6%	15.5% 36.9%	534 50.4%
イベント手伝い	36.1% 53.0%	35.4% 55.0%	23.1% 61.2%	32.9% 54.8%	49.3% 54.4%	5.7% 54.3%	10.7% 20.9%	438 41.3%
習い事	29.3% 56.7%	28.9% 59.2%	18.7% 65.5%	24.1% 52.9%	37.8% 54.9%	5.5% 69.6%	21.8% 56.0%	577 54.4%
該当者数	298 28.1%	282 26.6%	165 15.6%	263 24.8%	397 37.5%	46 4.3%	225 21.2%	1060

ベント手伝い」を中学生のときに体験している回答者は､｢なし」の比率がかなり低く､｢環境関連」や「スポーツ文化」関連の比率が高くなっている。また､「地域のイベントへの参加」を中学生の時に体験している回答者は、やはり「なし」の比率が低く、「スポーツ文化」関連や「子供関連」のボランティアの比率が高い。

ボランティア活動の観点からは､｢スポーツ文化｣関連が特徴的で､｢地域イベントの参加」や「イベントの手伝い」の比率が高くなっている。また､「なし」については「職業体験」「地域イベントの参加」「イベントの手伝い」を体験すると比率が低くなる傾向にある。

独立性の検定の結果、独立であるという帰無仮説は１％水準で棄却された。

高校生のときの体験学習とボランティアの関係は表６に示されている。体験学習の観点からは、「イベント手伝い」「地域のイベント」「職場見学」が特徴的である。これらの体験を高校のときにすると、「子供関連」「スポーツ文化」関連の比率が高まり、「なし」の比率が下がる。

また、これによりボランティア活動から見たときに､｢子供関連」「スポーツ文化」関連、「なし」については対応した特徴的な分布が見られる。

独立性の検定の結果、帰無仮説は１％水準で棄却された。

最後に、体験学習を全く経験していない場合についての結果が表７に示されている。体験学習の観点からは、「地域のイベント」「イベントの手伝い」が特徴的である。「イベント手伝い」を経験していない場合､「なし」の比率が高まり、「まちづくり」関連や「環

表６：高校の体験学習とボランティア活動

	福祉関連	子供関連	スポーツ文化	まちづくり	環境	国際	なし	該当数
野外キャンプ	29.8% 18.8%	30.9% 20.6%	20.2% 23.0%	28.2% 20.2%	37.2% 17.6%	5.3% 21.7%	21.3% 17.8%	188 17.7%
仕事調べ	28.8% 82.6%	27.3% 82.6%	16.9% 87.3%	25.0% 81.0%	37.7% 81.1%	4.0% 73.9%	21.6% 81.8%	853 80.5%
職場見学	33.0% 39.3%	36.3% 45.7%	21.7% 46.7%	28.2% 38.0%	38.9% 34.8%	3.9% 30.4%	16.6% 26.2%	355 33.5%
職業体験	34.8% 5.4%	34.8% 5.7%	26.1% 7.3%	23.9% 4.2%	45.7% 5.3%	2.2% 2.2%	15.2% 3.1%	46 4.3%
地域のまつり	31.8% 54.0%	31.2% 56.0%	19.7% 60.6%	27.6% 53.2%	41.0% 52.4%	5.3% 58.7%	19.7% 44.4%	507 47.8%
地域のイベント	36.2% 44.3%	37.8% 48.9%	22.2% 49.1%	31.0% 43.0%	46.6% 42.8%	7.7% 60.9%	13.4% 21.8%	365 34.4%
イベント手伝い	41.1% 33.9%	44.7% 39.0%	29.3% 43.6%	39.0% 36.5%	50.8% 31.5%	8.5% 45.7%	6.1% 6.7%	246 23.2%
習い事	32.6% 42.3%	30.3% 41.5%	20.2% 47.3%	25.4% 37.3%	38.3% 37.3%	6.0% 50.0%	20.7% 35.6%	386 36.4%
該当者数	298 28.1%	282 26.6%	165 15.6%	263 24.8%	397 37.5%	46 4.3%	225 21.2%	1060

表７：全く経験していない体験学習とボランティア活動の関係

	福祉関連	子供関連	スポーツ文化	まちづくり	環境	国際	なし	該当数
野外キャンプ	23.7% 19.5%	20.4% 17.7%	14.3% 21.2%	22.0% 20.5%	38.4% 23.7%	3.3% 17.4%	22.9% 24.9%	245 23.1%
仕事調べ	13.0% 1.0%	26.1% 2.1%	8.7% 1.2%	17.4% 1.5%	43.5% 2.5%	4.3% 2.2%	26.1% 2.7%	23 2.2%
職場見学	18.9% 2.3%	10.8% 1.4%	10.8% 2.4%	21.6% 3.0%	27.0% 2.5%	10.8% 8.7%	29.7% 4.9%	37 3.5%
職業体験	25.2% 69.8%	23.9% 69.9%	14.2% 70.9%	23.4% 73.4%	36.6% 76.1%	4.5% 80.4%	22.9% 84.0%	825 77.8%
地域のまつり	14.1% 3.0%	17.2% 3.9%	6.3% 2.4%	29.7% 7.2%	28.1% 4.5%	4.7% 6.5%	28.1% 8.0%	64 6.0%
地域のイベント	10.2% 4.4%	13.3% 6.0%	10.2% 7.9%	13.3% 6.5%	27.3% 8.8%	1.6% 4.3%	42.2% 24.0%	128 12.1%
イベント手伝い	12.9% 8.7%	14.4% 10.3%	6.9% 8.5%	8.4% 6.5%	18.3% 9.3%	2.0% 8.7%	47.0% 42.2%	202 19.1%
習い事	26.2% 10.7%	23.0% 9.9%	8.2% 6.1%	24.6% 11.4%	35.2% 10.8%	3.3% 8.7%	22.1% 12.0%	122 11.5%
該当者数	298 28.1%	282 26.6%	165 15.6%	263 24.8%	397 37.5%	46 4.3%	225 21.2%	1060

境関連」のボランティアへの参加率が下がる。「地域のイベント」を経験していない場合、やはり「なし」の比率が高まり､「福祉関連」「子供関連」のボランティアの比率が下がる。

ボランティア活動の観点からも同様に、「なし」の比率は「地域のイベント」「イベント手伝い」をしないと上がる傾向にあり、「福祉関連」や「子供関連」は下がる傾向にある。

独立性の検定の結果、独立であるという帰無仮説は１％水準で棄却された。

以上の結果から、体験学習の中でも特に「地域のイベント」「イベントの手伝い」を行うと、ボランティア活動の参加率が高まる傾向が示された。この点については、地域のイベントに参加することで地域の課題に取り組む誘引が高まること、ネットワークが作られることでボランティア活動に参加しやすい状況が作られること、地域のイベント自体がボランティア的な性格を保つ場合があること、など様々な可能性が考えられる。

４．体験学習と大学進学後の課外活動の関連

次に、体験学習と大学進学後の課外活動の関連について分析する。今回の調査では、課外活動としてアルバイトに関する質問（問 20 ～問 22）と､サークル活動に関する質問（問 23 ～問 25）を行っている。こうした課外活動と、体験学習の関係について分析する。

分析を行う前にまず、出身地域と課外活動の関係について考察する。出身地域を青森県出身者と青森県外出身者に分けて､各課外活動に関する差が見られるかどうかを検証した。

表８：出身地域とアルバイトの意向

	青森県出身	県外出身	合計
すでにしている	73	69	142
まだしていないがやりたいと思っている	238	420	658
探している	70	148	218
する予定はない	12	22	34
回答者数	393	659	1052

まず、アルバイトの意向についての結果が表８に示されている。アンケートが実施されたのが入学直後の４月から５月にかけてであるため、すでにアルバイトに従事している比率は低くなっており、現在探している人数もあまり多くない。比較すると、「すでにしている」の部分で青森県出身者と青森県外出身者の差がかなり大きくなっている。回答者数は県外出身者が約 1.5 倍であるのに対し、該当者は青森県出身者のほうが多くなっている。この部分の差があるため、カイ２乗検定により、出身地域によって回答の分布に差があることになる。他の部分については、青森県出身者と青森県外出身者で大きな差はない。

次に、アルバイトにおける働き方について確認した。１週間合計のアルバイトに従事している時間数は、青森県出身者が平均 11.3 時間、青森県外出身者が平均 11.8 時間であり、有意な差はなかった。また、従事している業種については表９に示されている。青森県外出身者はホテルやファストフード、居酒屋でアルバイトをしているケースが多く、一方で洋菓子屋など地元の小売店でアルバイトをしているケースは少ない。全体的に見るとファストフード店や居酒屋、学習支援でアルバイトをしている場合が多いようだ。

次に、サークル活動について同様に出身地別に回答の差を分析する。サークル等への所属率は、青森県出身者が 79.9％なのに対し、青森県外出身者は 89.0％で、青森県外出身者のほうが１％水準で有意に所属率が高かった。また、所属の理由、所属しなかった理由がそれぞれ表 10 に示されている。

表９：出身地と従事している業種

	青森県出身	県外出身	合計
スーパー、コンビニエンスストアなど	8	3	11
洋菓子屋やパン屋、お弁当屋、ガソリンスタンド、本屋	6	0	6
デパート、アパレル、その他販売業種	3	3	6
ホテル、旅館、結婚式場	4	7	11
ファストフード店、ファミリーレストラン、カフェ、デリバリー店、寿司屋など	14	19	33
居酒屋	9	14	23
カラオケボックス、ビデオレンタル、ゲームセンター、パチンコなど娯楽施設	1	1	2
学習塾、家庭教師など	19	13	32
その他	4	3	7
回答者数	68	63	131

表 10：出身地ごとのサークルに所属した理由・所属しなかった理由

所属した理由	青森県出身	県外出身者
交友関係が広くなるから	270	500
友達や恋人ができるから	101	212
先輩・後輩関係を築けるから	201	359
就職活動に有利だから	25	40
コミュニケーション能力がつくから	143	223
家族や友人の勧め	37	41
高校までやってきたから	104	171
なんとなく	27	55
回答者数	318	588

所属しない理由	青森県出身	県外出身者
興味がなかったから	32	19
時間的余裕がないから	27	27
経済的な理由で	3	7
勉強のために	11	15
高校までで十分やり尽くしたから	8	13
嫌な思い出が多いから	1	3
なんとなく、きっかけがなかったから	30	37
回答者数	80	73

サークル等に所属する理由としては、「交友関係が広くなるから」が最も多く、約 85%が理由に挙げていた。ついで、「先輩・後輩関係を築けるから」が約 62%であり、この２つの理由が半分以上の回答者が挙げた理由となっている。一方、サークル等に所属しない理由は全体的に分散している印象で、最も理由に挙げた回答が多かった「なんとなく、きっかけがなかったから」でも約 44%であった。

また、所属する理由として「就職活動に有利だから」「家族や友人の勧め」「なんとなく」は挙げられることが少なかった。１年生ということもあり、就職活動についてまだあまり考えられていないこともあるかもしれないが、主体的に所属を決めているようにも見られ、その意味では望ましい状況ではないか。また、所属しない理由としては「経済的な理由で」や「嫌な思い出があるから」が少なく、やりたくてもできないケースや、ネガティブな印象で所属を避ける傾向もあまり高くないように見えるのも望ましい状況であるように思われる。ただし、「時間的余裕がないから」が理由としては多くなっており、１年生の４月から５月でもあるので、まだ大学生活のペースを掴む段階と考えている回答者が多いようにも感じられる。また、出身地について差があるかどうか検定を行ったが、いずれの項目も出身地による有意な差は見られなかった。したがって、所属するかしないかの判断には出身地による差があるが、所属理由については大きな差がないことが示唆された。

以上の結果から、課外活動に従事するかどうかの判断には出身地域による差が存在する

可能性があるが、アルバイトの形態やサークル等の所属に関する判断には地域差はないように思われる。そこで、課外活動の従事と体験学習の関係については青森県出身者と青森県外出身者を区別して分析を行い、サークル等の所属に関する分析は地域による区分を行わないこととする[5]。

表 11：体験学習とアルバイトの従事

	アルバイト従事(n=142)				非アルバイト従事(n=910)				有意差の検定			
	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし
野外キャンプ	69.7%	31.0%	15.5%	22.5%	70.2%	32.9%	18.1%	23.3%				
仕事調べ	59.2%	69.7%	78.2%	2.1%	50.4%	73.6%	80.9%	2.2%	従事**			
職場見学	60.6%	76.8%	37.3%	3.5%	53.2%	81.1%	32.9%	3.5%	従事*			
職業体験	1.4%	21.1%	3.5%	75.4%	2.2%	14.9%	4.4%	78.4%		従事*		
地域のまつり	88.7%	68.3%	55.6%	5.6%	88.9%	63.5%	46.8%	6.0%			従事**	
地域のイベント	85.9%	54.2%	40.1%	8.5%	77.6%	49.8%	33.6%	12.6%	従事***			
イベント手伝い	67.6%	43.7%	23.2%	16.2%	62.4%	41.0%	23.4%	19.6%				
習い事	78.2%	56.3%	31.7%	13.4%	80.2%	54.4%	37.4%	11.1%				
アルバイト			26.1%	69.7%			12.0%	85.2%	−	−	従事***	なし***

*:10%水準、**:5%水準、***:1%水準で有意

まず、アルバイトに従事している回答者と従事していない回答者の結果が表 11 に示されている。統計的に有意にアルバイト従事の比率を高めるのは小学校については「仕事調べ」、「職場見学」、「地域のイベントへ」であった[6]。中学校においては「職業体験」であった。高校については「地域のまつり」と「アルバイト」の経験であった。一方、「アルバイト」を経験していないとアルバイト従事の割合が低い傾向が見られた。小学校や中学校のときに仕事について体験学習をすることが、大学進学後のアルバイトの誘引を高めている可能性がある。また、高校時代にアルバイトをすでにしていると、大学でもアルバイトに従事しやすいことが示唆されている[7]。

青森県出身者について、体験学習とアルバイトの関係について表 12 にまとめられている。小学校の「仕事調べ」や「地域のイベント」、「イベントの手伝い」、中学校での「職業体験」、「地域のまつり」、「地域のイベント」、高校時代の「地域のまつり」、「アルバイト」の経験がアルバイトの従事の比率を高める傾向にある。一方で、中学校の「仕事調べ」はアルバイトの従事を減らす傾向が示された。また、「地域のイベント」の経験がなかったり、

[5] アルバイトの形態については現時点でアルバイトを行っている回答者が少ないため、今回は分析を行わない。
[6] なお、比率の検定については通常は比率の違いを示すもので、そこから因果関係は導かれない。ただし、本調査では体験学習は高校以前、アルバイトやサークル活動は大学入学後と明確に時点に差があり、ここでは因果関係を前提として議論している。
[7] ただし、１年生の４月から５月に行われた調査であることを考えると、これは高校時代のアルバイトを継続していることを表している可能性もある。

表 12：体験学習とアルバイト（青森県出身者）

	青森県/従事(n=73)				青森県/非従事(n=320)				有意差の検定			
	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし
野外キャンプ	64%	29%	21%	26%	61%	32%	22%	30%				
仕事調べ	58%	66%	84%	1%	49%	74%	82%	2%	従事**	なし**		
職場見学	59%	77%	33%	3%	52%	80%	38%	3%				
職業体験	1%	22%	3%	75%	3%	13%	5%	79%	なし*	従事***		
地域のまつり	90%	71%	60%	4%	87%	60%	49%	6%		従事***	従事***	
地域のイベント	89%	60%	44%	8%	74%	48%	38%	13%	従事***	従事***		なし**
イベント手伝い	68%	41%	22%	16%	57%	44%	28%	20%	従事***			
習い事	77%	52%	26%	16%	76%	49%	31%	16%				
アルバイト			29%	67%			13%	84%	−	−	従事***	なし***

*:10%水準、**:5%水準、***:1%水準で有意

「アルバイト」を経験したことがない場合はアルバイトの従事割合が低い傾向にある。青森県出身者であることを考えると、地域とのつながりが薄い場合にはアルバイトを行わない（＝青森県内で仕事をしない）傾向が示されている可能性がある。中学校の「仕事調べ」を行うとアルバイトを行わない傾向になることについては原因はよくわからないが、青森県内の労働環境が必ずしも理想的でないことに気づいてしまうのかもしれない。

表 13：体験学習とアルバイト（青森県外出身者）

	県外出身/従事(n=69)				県外出身/非従事(n=590)				有意差の検定			
	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし
野外キャンプ	75%	33%	10%	19%	75%	34%	16%	19%			なし**	
仕事調べ	61%	74%	72%	3%	51%	73%	81%	2%	従事**		なし**	
職場見学	62%	77%	42%	4%	54%	82%	30%	4%	従事*		従事***	
職業体験	1%	20%	4%	75%	2%	16%	4%	78%				
地域のまつり	87%	65%	51%	7%	90%	66%	45%	6%				
地域のイベント	83%	48%	36%	9%	80%	51%	31%	12%				
イベント手伝い	67%	46%	25%	16%	65%	39%	21%	19%				
習い事	80%	61%	38%	10%	83%	57%	41%	9%				
アルバイト			23%	72%			12%	86%	−	−	従事***	なし***

*:10%水準、**:5%水準、***:1%水準で有意

次に、青森県外出身者についての結果が表13に示されている。小学校の「仕事調べ」や「職場見学」、高校での「職場見学」、「アルバイト」の経験がアルバイト従事の割合を高めている。一方、高校時代の「野外キャンプ」や「仕事調べ」はアルバイト従事の割合を下げている。

青森県出身者と青森県外出身者を比較すると、小学校の職業に関する体験学習は大学入学後のアルバイトの従事を高める点では共通している。一方、イベントへの参加は青森県出身者についてはアルバイトへの従事を高めるが、青森県外出身者については影響を与えていないことが示された。これは、青森県出身者については地元が現在生活している地域に近いためネットワークを通じたアルバイトという入口があるのに対し、青森県外出身者は地元が異なるため、そうしたネットワークの存在に影響されていない可能性を示している。

表 14：体験学習とアルバイト（従事者の出身地比較）

	従事/県内出身(n=73)				従事/県外出身(n=69)				有意差の検定			
	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし
野外キャンプ	64%	29%	21%	26%	75%	33%	10%	19%	県外***		青森***	青森*
仕事調べ	58%	66%	84%	1%	61%	74%	72%	3%		県外*	青森***	
職場見学	59%	77%	33%	3%	62%	77%	42%	4%			県外**	
職業体験	1%	22%	3%	75%	1%	20%	4%	75%				
地域のまつり	90%	71%	60%	4%	87%	65%	51%	7%			青森**	県外*
地域のイベント	89%	60%	44%	8%	83%	48%	36%	9%	青森**	青森***	青森*	
イベント手伝い	68%	41%	22%	16%	67%	46%	25%	16%				
習い事	77%	52%	26%	16%	80%	61%	38%	10%		県外**	県外***	青森*
アルバイト			29%	67%			23%	72%	−	−		

*:10%水準、**:5%水準、***:1%水準で有意

この傾向を確認するために、アルバイトに従事している回答者について、出身地による差があるかどうかを検定した。結果は表 14 に示されている。地域のイベントに関連する項目は青森県出身者が比率が高い。一方、「習い事」については青森県外出身者のほうが比率が高い。「野外キャンプ」については小学校については青森県外出身者が、高校については青森県出身者が比率が高い。「仕事調べ」については中学校については青森県外出身者が、高校については青森県出身者が比率が高い。「職場見学」は高校については青森県外出身者のほうが比率が高いようだ。また、高校のアルバイト経験については出身地による有意な差は見られなかった。

表 15：体験学習とサークルの所属

	サークル所属(n=906)				非サークル所属(n=153)				有意差の検定			
	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし
野外キャンプ	71%	34%	18%	22%	63%	23%	18%	29%	所属**	所属***		非所属*
仕事調べ	54%	73%	81%	2%	40%	75%	78%	3%	所属***			
職場見学	55%	80%	33%	3%	50%	82%	35%	6%				非所属*
職業体験	2%	16%	4%	78%	3%	12%	5%	76%				
地域のまつり	89%	65%	49%	6%	87%	59%	42%	7%				
地域のイベント	78%	50%	35%	13%	80%	51%	33%	9%				
イベント手伝い	64%	42%	24%	19%	59%	40%	18%	22%			所属*	
習い事	82%	56%	38%	10%	69%	47%	25%	19%	所属***	所属*	所属***	非所属***
アルバイト			14%	83%			14%	82%				

*:10%水準、**:5%水準、***:1%水準で有意

つぎに、サークル等の活動についても分析を行う。まず、全体について体験学習とサークル活動の参加の関係を表 15 に示している。「野外キャンプ」、「仕事調べ」、「イベント手伝い」、「習い事」などを経験しているとサークルに所属する比率が高い。また、「野外キャンプ」、「職場見学」、「習い事」などを行っていないと、サークル非所属の比率が高くなる。「野外キャンプ」や「習い事」、「イベントの手伝い」のように、学校の授業以外の体験をしていると大学進学後も課外活動を行う傾向にあり、こうした学校外の活動を体験していないと、サークル活動を行わなくなると考えられる。

表 16：体験学習とサークルの所属（青森県出身者）

	青森県/所属(n=318)				青森県/非所属(n=80)				有意差の検定			
	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし
野外キャンプ	64%	35%	22%	28%	53%	15%	19%	36%	所属***	所属***		非所属**
仕事調べ	54%	72%	83%	2%	39%	75%	76%	4%	所属***		所属**	非所属*
職場見学	54%	81%	38%	2%	54%	73%	36%	8%		所属***		非所属***
職業体験	3%	15%	4%	79%	4%	11%	4%	76%				
地域のまつり	87%	63%	52%	6%	88%	58%	48%	5%				
地域のイベント	75%	50%	39%	14%	80%	50%	39%	6%				所属***
イベント手伝い	60%	45%	29%	19%	56%	40%	18%	23%			所属***	
習い事	76%	52%	32%	15%	73%	43%	20%	20%		所属**	所属***	
アルバイト			16%	80%			15%	83%	−	−		

*:10%水準、**:5%水準、***:1%水準で有意

次に、青森県出身者について同様の比較を行った。結果が表 16 に示されている。やはり「野外キャンプ」、「仕事調べ」、「職場見学」、「イベントの手伝い」、「習い事」といった活動を経験していると、サークルに所属する割合が高まる傾向にある。また、「野外キャンプ」や「仕事調べ」、「職場見学」を経験していないとサークル所属の割合は低くなる傾向にある。

表 17：体験学習とサークルの所属（青森県外出身者）

	県外出身/所属(n=588)				県外出身/非所属(n=73)				有意差の検定			
	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし	小学校	中学校	高校	体験なし
野外キャンプ	76%	34%	16%	19%	74%	32%	16%	21%				
仕事調べ	54%	73%	80%	2%	41%	74%	81%	1%	所属***			
職場見学	56%	80%	31%	4%	45%	92%	34%	4%	所属**	非所属***		
職業体験	2%	17%	4%	78%	1%	14%	5%	77%				
地域のまつり	90%	66%	47%	6%	86%	60%	37%	8%			所属**	
地域のイベント	80%	50%	32%	12%	79%	52%	27%	12%				
イベント手伝い	66%	40%	22%	19%	63%	40%	18%	21%				
習い事	84%	58%	42%	8%	66%	52%	30%	18%	所属***		所属***	非所属***
アルバイト			13%	85%			14%	82%				

*:10%水準、**:5%水準、***:1%水準で有意

青森県外出身者の結果が表 17 に示されている。「仕事調べ」、「イベントの手伝い」、「習い事」などがサークルに所属する割合を高めることは青森県出身者と共通している。また、「習い事」を体験しない場合に非所属の割合が高くなるのも同じである。「職場見学」については、中学校で体験しているとサークルに所属する割合が下がる傾向が見られた。

以上の結果から、サークル活動への所属については、「習い事」や「野外キャンプ」といった学校活動外の行事の参加経験が所属を高めることがわかった。アルバイトと異なり、アルバイトの体験や地域のイベントへの参加についてはあまり大きな差が見られなかった。また、体験学習を経験していないと、サークル活動に所属しない傾向が高くなることも示された。

表 18：体験学習とサークル所属理由の関係

	条件変数		組合変数	サポート	信頼度	リフト
1	コミュニケーション能力がつくから	⇒	地域のイベントの参加（中学）	0.247	0.594	1.187
2	野外キャンプ（高校）	⇒	先輩・後輩関係を築けるから	0.129	0.748	1.184
3	地域のイベントの参加（高校）	⇒	コミュニケーション能力がつくから	0.164	0.481	1.158
4	地域のイベントの手伝い（高校）	⇒	コミュニケーション能力がつくから	0.114	0.475	1.144
5	コミュニケーション能力がつくから	⇒	地域のイベントの手伝い（中学）	0.199	0.478	1.142
6	地域のイベントの参加（中学）	⇒	友達や恋人ができるから	0.135	0.396	1.130
7	コミュニケーション能力がつくから	⇒	地域のまつりの参加（高校）	0.227	0.548	1.121
8	職場見学や職場訪問をしたことがある（高校）	⇒	コミュニケーション能力がつくから	0.154	0.465	0.121
9	野外キャンプ（中学）	⇒	友達や恋人ができるから	0.129	0.392	1.119
10	地域のイベントの手伝い（高校）	⇒	先輩・後輩関係を築けるから	0.170	0.705	1.116

最後に、体験学習とサークルに所属する理由の関係をアソシエーション分析により分析した。体験学習とサークル所属の組み合わせについて、リフトの高いものから 10 組取りだしたものが表 18 に示されている。高学年の体験学習への参加とサークル所属理由の結び付きが強い傾向が示されている。また、地域イベント関連の体験とコミュニケーション能力の結び付きが強いように思われる。

以上のことをまとめると、次のことが示唆される。まず、アルバイトについては高校時代のアルバイト経験がアルバイトに従事するかに影響を与える。また、青森県出身者については地域のイベントへの参加がアルバイトにつながっている傾向が見られた。地域差については、青森県出身者のほうがアルバイトを行っている比率が高く、業種にも差が見られた。ただし、こうした点はアンケートが１年生の４月から５月に実施されたものであるため､そもそもアルバイト先を探している段階であり､１ヶ月でアルバイト先が決まるケースはある程度地縁があった場合が多い、ということを表しているのかもしれない。

サークル活動については地域のイベントの影響はアルバイトほど強くなく、どちらかというと習い事や野外キャンプなど、学校における正課以外の活動を行った経験があるかどうかが大きいように思われる。アルバイトとは逆に、サークルについては地域外の学生の方が積極的に所属しているようである。ただし、サークルに所属する理由そのものについては地域による差はなかった。また、サークルに所属する理由と体験学習については、中学や高校などある程度高い学年で地域のイベントに参加した場合はコミュニケーション能力の養成を上げる傾向が強いことが示された。

５．まとめ

体験学習とボランティア活動や課外活動について分析した結果､次のことが示唆された。

まず、震災ボランティアに関しては、調べ物と地域のイベントの影響があると考えられる。体験学習のタイプにより、情報収集に基づく行動と、直接的な援助に行動が分かれるように思われる。また、被災地に近い東北地方ではより直接的な援助行動の傾向が強いことが示唆された。さらに、体験学習の中でも習い事が被災地への金銭的な援助につながる傾向にあり、これは学生の体験によるものというよりは家計の余裕を表しているように思われる。

より広いボランティア活動と体験学習の関連については、地域のイベントへの参加の影響が大きいように思われる。イベントへの参加を通じて、ボランティア活動に従事する割合が高まっているようである。

課外活動との関わりについては、アルバイトとサークル活動では影響や要因が異なるように思われる。青森県出身者は青森県外出身者と比べるとアルバイトに従事する比率が高く、サークルに所属する比率は低い。また、アルバイトについては地域のイベントとの関連が、サークル活動については習い事など正課外の活動の影響が、それぞれ強いように思われる。また、体験学習を経験しない場合、サークルに参加しない傾向が強いことも示された。ただし、調査が１年生の４月から５月に行われていることを考えると、特にアルバイトについては未だ調整過程である可能性がある。

参 考 資 料

目　次

1　回答者の集計表 …… 67

2　回答者用質問紙 …… 79

回答者の集計表

ｎ＝1061
計画サンプル　　1265
回収率：　1061/1265＝83.9％

・分岐により非該当が生じる場合は、スクリーニング質問で確実に該当と確認できる回答者のみを該当者とした。

問１　あなたが今年度に受講する地域志向科目はどのくらいありますか。科目数を教えてください。まだ科目の登録をしていない場合でも、見込みの科目数を教えてください。

（　　科目程度）
平均　1.7　科目　　SD　1.8 科目　　min. 0　　max.　28

問２　あなたが今年度受講予定の講義・演習・実習全体を通じて、農作業や文化体験、調査・企画など、地域の現場に触れて体験する機会は、どのくらいあると期待していますか。
あてはまるもの１つに○をつけてください。

24.5　1. 期待していない　　58.3　2. 1～2 回程度
13.3　3. 3～5 回程度　　2.5　4. 6 回以上　　DKNA　1.5

問３　あなたにとっての「地域」とは、どのような範囲を指しますか。
あてはまるものに１つに○をつけてください。

13.3　1. 居住している町内　　33.0　2. 弘前市内
2.3　3. 弘前市以外のつがる地域内　　24.7　4. 青森県内
2.2　5. 東北地域　　11.4　6. 地方部一般（出身地や居住地には限らない）
12.1　7. 自分の出身地　　DKNA　1.1

参考資料１

問４　あなたは、現在、大学生活を通じてどのような力（技能・知識）を身につけたいと思いますか。自分自身の判断でかまいませんので、あてはまるものすべてに○をつけてください。

63.4　1. 多元的に問題の本質を見通す力
66.1　2. 問題を個人およびチームとして解決する力
36.7　3. 自然や社会への洞察を深化させる力
55.1　4. 専門知識を国際社会や地域社会の問題解決に応用する応用力
38.2　5. 高度な学識を活かす力
46.9　6. 学び続ける力

【進学について】

問５　高校生のとき、あなたは進学か就職かどちらを希望していましたか。

96.4　1. 進学　0.9　2. 就職　2.5　3. 決めかねていた　DKNA　0.2

問６　進路を決める時に相談相手はいましたか。その相談相手は誰でしたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

52.1　1. 父親　74.8　2. 母親　14.7　3. 兄弟・姉妹　5.3　4. 親戚
37.6　5. 友人・知人　75.0　6. 学校の先生　8.9　7. 学校の先輩
2.5　8. その他（　　）
9.5　9. 一人で決めた

問７　弘前大学はあなたにとって第一希望の大学でしたか

49.8　1. はい　（**問８に**お進みください）
50.1　2. いいえ　（**問９に**お進みください）　DKNA　0.1

問８　弘前大学が第一志望の大学だった理由を教えてください。
あてはまるものすべてに〇をつけてください。

該当者　528 名

24.0　1. 弘前大学の教育内容が良かったから
76.4　2. 行きたい学部、学科があったから
20.2　3. 教師、友人の勧めがあったから
18.9　4. 家族や親戚の勧めがあったから
28.3　5. 経済的な理由で
16.4　6. センター試験の結果などから

問９　弘前大学が第一志望の大学でなかった方にうかがいます。

該当者　532 名

（1）　第一志望の大学の所在地を教えてください。

28.7　1. 北海道　0.8　2. 青森県　3.2　3. 岩手県　0.8　4. 秋田県
14.0　5. 宮城県　1.3　6. 山形県　0.2　7. 福島県　32.8　8. 関東甲信
11.6　9. 東海・北陸　2.4　10. 近畿　2.1　11. 中国・四国
1.3　12. 九州・沖縄　0.0　13. 外国

DKNA　0.9

（2）　第一志望の大学ではなく、弘前大学を選んだのはなぜですか。
あてはまるものすべてに〇をつけてください。

7.3　1. 弘前大学の教育内容が良かったから
32.0　2. 行きたい学部、学科があったから
18.2　3. 教師、友人の勧めがあったから
9.4　4. 家族や親戚の勧めがあったから
15.0　5. 経済的な理由で
84.8　6. センター試験の結果などから

参考資料１

【みなさんにおたずねします】

【就業希望について教えてください】

問 10　どこで働くことを希望しますか。あてはまるもの１つに○をつけてください。

23.1　1．北海道　25.1　2．青森県　5.3　3．岩手県　3.7　4．秋田県
6.4　5．宮城県　1.3　6．山形県　1.0　7．福島県　25.2　8．関東甲信
3.0　9．東海・北陸　1.7　10．近畿　0.1　11．中国・四国
0.4　12．九州・沖縄　2.0　13．外国

DKNA　1.8

問 11　希望する地域はあなたの出身地ですか。

67.8　1．はい　（**問 12 へ**）　31.3　2．いいえ（**問 13 へ**）

DKNA　0.9

問 12　出身地域で働きたい理由を教えてください。あてはまるものすべてに○をつけてください。

該当者　719 名

16.1　1．自分の能力が活かせそうだから　7.2　2．希望する企業があるから
24.7　3．知人が多いから　24.6　4．家族を経済的に支えたいから
69.9　5．出身地域が好きだから
43.7　6．就職後の生活が精神的に楽だと思うから
5.5　7．希望する給与や待遇が期待できるから
17.8　8．別の場所で働くのは経済的負担が大きいから
6.4　9．親と同居したいから
5.2　10．その他　（具体的に　　）

問 13　出身地域以外で働きたい理由をお知らせください。
あてはまるものすべてに○をつけてください。

該当者　332 名

22.1　1. 自分の能力が活かせそうだから　24.7　2. 希望する企業があるから
4.1　3. 知人が多いから　11.8　4. 家族を経済的に支えたいから
32.7　5. その地域が好きだから
10.0　6. 就職後の生活が精神的に楽だと思うから
38.1　7. 希望する給与や待遇が期待できるから
49.9　8. 出身地域と別の場所で生活してみたいから
0.9　9. 親と同居したいから
4.7　10. その他　（具体的に　　）

【みなさんにおたずねします】

問 14　民間企業で働くことを希望しますか。あてはまるもの１つに○をつけてください。

19.4　1. 民間企業を希望する。
34.9　2. 公務員を希望する。
45.2　3. どちらでもかまわない。

DKNA　0.5

問 15　あなたが働きたいと希望している会社の業種を教えてください。
あてはまるものすべてに○をつけてください。

45.8　1. 公務　8.7　2. 農林漁業　4.4　3. 建設業　17.7　4. 製造業
4.6　5. 電気・ガス・水道業　6.9　6. 運輸・通信業　4.9　7. 卸売、小売業
15.0　8. サービス業　8.5　9. 金融・保険業　2.4　10. 不動産業
26.4　11. 教育・学習支援業　23.9　12. 医療・福祉　5.0　13. 飲食業・宿泊業
5.4　14. その他　（具体的に　　）

参考資料１

【これまでの生活について教えてください】

問 16　あなたの小学生・中学生・高校生のときのことについてお聞きします。以下のことを体験したことがありますか。それぞれの項目ごとにあてはまるものすべてに○をつけてください。

		小学生で体験した	中学生で体験した	高校生で体験した	体験したことがない
1	学校行事以外で、野外で炊事をしたりテントに泊まったりしたことがある	70.2	32.5	17.7	23.1
2	興味のある仕事について、本やインターネットなどで調べたことがある	51.7	73.2	80.6	2.2
3	職場見学や職場訪問をしたことがある	54.1	80.5	33.6	3.6
4	4 日以上の職場体験やインターンシップを体験したことがある	2.1	15.7	4.3	78.0
5	地域の祭りに参加したことがある	88.8	64.2	48.0	6.0
6	地域のイベントに参加したことがある	78.6	50.4	34.4	12.2
7	地域のイベントの手伝いやごみ拾いなどに参加したことがある	63.2	41.4	23.1	19.0
8	有料の学習塾やピアノ教室、水泳教室などの習い事に通ったことがある	79.7	54.6	36.6	11.5
9	アルバイトをしたことがある	0.3	0.5	14.0	82.9

問 17　あなたは東日本大震災から現在までで、つぎのようなことを行ったことがありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

28.7　1. 震災に関する情報を積極的に集めた
18.5　2. 被災地の家族・親戚、友人・知人に連絡をとった
49.6　3. 募金・寄付を行った
10.8　4. 被災地の食品・物産、支援グッズなどを購入した
5.4　5. 物資を送ったり、団体に提供したりした
14.2　6. 旅行で被災地に行った
8.1　7. 震災にかかわるボランティア活動を行った
22.0　8. この中に、おこなったことは１つもない

問 18　「震災にかかわるボランティア活動を行った」に〇をつけた方にお聞きします。

該当者　　86 名

（1）活動を行った場所はどこでしたか

52.8　1. 被災地　（　具体的に　　）
44.0　2. 被災地以外で

（2）どのように活動に参加したのか教えてください。

2.2　1. 現地の災害ボランティアセンターを通して
63.4　2. 学校のサークルや授業の一環で
11.7　3. ボランティア団体・NPO・NGO を通じて
14.0　4. 市町村、町内会など、地域のみなさんと
14.0　5. ご家族と一緒に
4.3　6. 団体に加入しないで個人で行った

【みなさんにおたずねします】

問 19　あなたはつぎのようなボランティア活動を行ったことがありますか。
あてはまるものすべてに〇をつけてください

28.1　1. 福祉に関係した活動（高齢者施設や福祉施設など）
26.6　2. 子どもに関係した活動
15.7　3. スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動
24.8　4. まちづくり・生活に関連した活動
37.5　5. 環境に関連した活動
4.3　6. 国際協力に関連した活動
1.2　7. その他（具体的に　　）

参考資料１

【これからの大学生活についてお尋ねします】

【アルバイトについて】

問 20　あなたはアルバイトをしていますか。

13.4　1. すでにしている
62.1　2. まだしていないがやりたいと思っている。
20.6　3. 探している
3.2　4. する予定はない

DKNA　0.7

問 21　アルバイトをしている方にお尋ねします。一週間で合計何時間、働いていますか。

該当者　143 名

（**一週間合計**　平均　11.5　S.D　8.9　**時間程度**）

問 22　どのような仕事をしていますか。

該当者　143 名

9.1　1. スーパー、コンビニエンスストアなど
4.2　2. 洋菓子やパン屋、お弁当屋、ガソリンスタンド、本屋
4.2　3. デパート、アパレル、その他販売業種
9.8　4. ホテル、旅館、結婚式場
23.1　5. ファストフード店、ファミリーレストラン、カフェ、デリバリー店、寿司屋など
16.1　6. 居酒屋
1.4　7. カラオケボックス、ビデオレンタル、ゲームセンター、パチンコなど娯楽施設
24.5　8. 学習塾、家庭教師など
0.0　9. 警備、建築、土木、測量など
0.0　10. 引越、配送、郵便局、新聞配達など
0.0　11. 官公庁、国、自治体など
4.9　12. その他（　　）

DKNA　2.8

【サークル活動について】

問 23　あなたは現在学内や学外のクラブやサークル、部活に所属していますか？

85.6　1. 所属している（**問 24 へ**）　　14.4　2. 所属していない（**問 25 へ**）

問 24　所属している方におたずねします。あなたが、サークルや部活に所属した理由は何ですか。あてはまるものすべてに〇をつけてください

該当者　908 名

85.0　1. 交友関係が広くなるから　　34.6　2. 友達や恋人ができるから

61.9　3. 先輩・後輩関係を築けるから　　7.2　4. 就職活動に有利だから

40.5　5. コミュニケーション能力がつくから

8.6　6. 家族や友人の勧め

30.3　7. 高校までやってきたから

9.0　8. なんとなく

問 25　所属していなかった方におたずねします。サークルや部活に入らなかったのはなぜですか。あてはまるものすべてに〇をつけてください

該当者　153 名

33.3　1. 興味がなかったから　　35.3　2. 時間的余裕が無いから

6.5　3. 経済的な理由で　　17.0　4. 勉強のために

13.7　5. 高校までで十分やり尽くしたから

2.6　6. 嫌な思い出が多いから

43.8　7. なんとなく、きっかけがなかったから

参考資料１

【みなさんにおたずねします】

問 26　「弘前（弘前市・つがる地域）」に対する意識についてお聞きします。
あてはまる数値に一つだけ○を付けて下さい。

		あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
1.	私は地域の一員であると感じる	15.9	23.1	29.2	20.3	11.5
2.	私はこの地域の将来のことが、とても気になる	17.0	26.8	23.4	20.8	9.1
3.	私はこの地域に愛着を感じる	13.2	19.9	25.5	26.7	14.1
4.	この地域を離れることは、たとえ離れたくても、大変困難である	38.6	25.4	25.1	7.8	3.1
5.	現在この地域にいるのは、そうしたいからであると同時に必要だからである	10.0	13.3	29.0	31.2	16.5

さいごに、あなた自身についておたずねします。

問 27　学籍番号

問 28　性別

50.7　1. 男性　　48.9　2. 女性　　DKNA　0.4

問 29　学部

（ 20.4　人文社会科学部　　14.0　教育学部　　29.5　理工学部
17.6　農学生命科学部　　18.0　医学部保健学会　　）学部

問 30　あなたが同居していた、あるいは同居しているご家族の方すべてに〇をつけてください。

83.2　1. 父親　　93.9　2. 母親　　27.9　3. 祖父・祖母　　20.0　4. 兄
21.5　5. 姉　　26.9　6. 弟　　27.1　7. 妹　　2.7　8. その他　（　　）

問 31　実家の所在地についてお知らせください。

28.6　1．北海道

25.1　2．青森県（弘前市・つがる地域）　66.2　3．青森県（弘前市・つがる地域以外）

7.4　4．岩手県　6.3　5．秋田県　3.4　6．宮城県　1.6　7．山形県

1.2　8．福島県　7.5　9．関東甲信　3.3　10．東海・北陸　0.9　11．近畿

0.5　12．中国・四国　0.4　13．九州・沖縄　0.4　14．外国

DKNA　1.0

問 32　父親の出身地は実家の所在地ですか。

60.8　1．はい　36.6　2．いいえ　DKNA　2.6

問 33　母親の出身地は実家の所在地ですか。

54.0　1．はい　44.8　2．いいえ　DKNA　1.2

長い間のご協力、本当にありがとうございました

大学生の地元意識と就業に関する意識調査

弘前大学地域未来創生センター

この調査は、弘前大学地域未来創生センターによる調査・研究事業の一環として行うもので、弘前大学に在学中の大学生の皆さまの地元意識と就業に関する意識について調査し、若年者の県外流出を抑制し、地元定着を促進するための対策を講ずるべく、その基礎資料として利用するものです。**この調査の結果や内容は統計的に処理し、地域全体としての傾向を把握することだけを目的として利用されますので、皆様のご回答が個々に分析されることは絶対にありません。**授業の成績等には一切関係がありません。正しい答えはありませんので、みなさまが感じたままにご回答ください。このアンケートへの回答は、自由です。答えたくない質問はとばしたり、途中で回答を中止したりしても、みなさんが不利益をこうむることは一切ありません。みなさまの回答をもって，この調査への協力に同意していただいたものとさせていただきます。調査にかかる所要時間はおよそ 15 分程度となっています。

ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

ご記入にあたってのお願い

1．2019 年 4 月時点でお答え下さい。

2．回答は、あなたご自身に当てはまる選択肢を選び、番号を〇で囲んでいただく形式がほとんどです。設問によっては具体的な内容を文章でご記入いただくところもあります。

3．ご記入済みのアンケート用紙は、封筒に入れて提出してください。

教員がゼミナール単位で回収し、

2019 年 5 月 10 日（金）までに

各学部の教務担当（学務係）に提出いただきますようお願いいたします。

4．本調査についてご不明な点がございましたら、電話やメールにて下記にお問い合わせ下さい。

弘前大学地域未来創生センター

電話・ファクス　：　0172-39-3198　E-mail　：　irrc@hirosaki-u.ac.jp

お電話の受付は月曜日から金曜日の 10 時より 17 時までとなっております。なにとぞご了承ください

〇この調査に含まれている内容以外で、政府や行政、当センターへのご意見、ご要望がございましたら、この欄にお書きください。

参考資料２

問１　あなたが今年度に受講する地域志向科目はどのくらいありますか。科目数を教えてください。まだ科目の登録をしていない場合でも、見込みの科目数を教えてください。

（　　科目程度）

問２　あなたが今年度受講予定の講義・演習・実習全体を通じて、農作業や文化体験、調査・企画など、地域の現場に触れて体験する機会は、どのくらいあると期待していますか。
あてはまるもの１つに○をつけてください。

1. 期待していない
2. 1～2 回程度
3. 3～5 回程度
4. 6 回以上

問３　あなたにとっての「地域」とは、どのような範囲を指しますか。
あてはまるものに１つに○をつけてください。

1. 居住している町内
2. 弘前市内
3. 弘前市以外のつがる地域内
4. 青森県内
5. 東北地域
6. 地方部一般（出身地や居住地には限らない）
7. 自分の出身地

問４　あなたは、現在、大学生活を通じてどのような力（技能・知識）を身につけたいと思いますか。自分自身の判断でかまいませんので、あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 多元的に問題の本質を見通す力
2. 問題を個人およびチームとして解決する力
3. 自然や社会への洞察を深化させる力
4. 専門知識を国際社会や地域社会の問題解決に応用する応用力
5. 高度な学識を活かす力
6. 学び続ける力

【進学について】

問５　高校生のとき、あなたは進学か就職かどちらを希望していましたか。

1. 進学　2. 就職　3. 決めかねていた

問６　進路を決める時に相談相手はいましたか。その相談相手は誰でしたか。
あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 父親　2. 母親　3. 兄弟・姉妹　4. 親戚　5. 友人・知人
6. 学校の先生　7. 学校の先輩　8. その他（　　）
9. 一人で決めた

問７　弘前大学はあなたにとって第一志望の大学でしたか

1. はい　（**問８に**お進みください）
2. いいえ　（**問９に**お進みください）

問８　弘前大学が第一志望の大学だった理由を教えてください。
あてはまるものすべてに〇をつけてください。

1. 弘前大学の教育内容が良かったから
2. 行きたい学部、学科があったから
3. 教師、友人の勧めがあったから
4. 家族や親戚の勧めがあったから
5. 経済的な理由で
6. センター試験の結果などから

問９　弘前大学が第一志望の大学でなかった方にうかがいます。

（1）　第一志望の大学の所在地を教えてください。

1. 北海道　2. 青森県　3. 岩手県　4. 秋田県　5. 宮城県
6. 山形県　7. 福島県　8. 関東甲信　9. 東海・北陸　10. 近畿
11. 中国・四国　12. 九州・沖縄　13. 外国

（2）　第一志望の大学ではなく、弘前大学を選んだのはなぜですか。
あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 弘前大学の教育内容が良かったから
2. 行きたい学部、学科があったから
3. 教師、友人の勧めがあったから
4. 家族や親戚の勧めがあったから
5. 経済的な理由で
6. センター試験の結果などから

【みなさんにおたずねします】
【就業希望について教えてください】

問 10　どこで働くことを希望しますか。あてはまるもの１つに○をつけてください。

1. 北海道　2. 青森県　3. 岩手県　4. 秋田県　5. 宮城県
6. 山形県　7. 福島県　8. 関東甲信　9. 東海・北陸　10. 近畿
11. 中国・四国　12. 九州・沖縄　13. 外国

問 11　希望する地域はあなたの出身地ですか。

1．はい　（**問 12 へ**）　2. いいえ（**問 13 へ**）

問 12　出身地域で働きたい理由を教えてください。あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 自分の能力が活かせそうだから
2. 希望する企業があるから
3. 知人が多いから
4. 家族を経済的に支えたいから
5. 出身地域が好きだから
6. 就職後の生活が精神的に楽だと思うから
7. 希望する給与や待遇が期待できるから
8. 別の場所で働くのは経済的負担が大きいから
9. 親と同居したいから
10. その他　（具体的に　　）

問 13　出身地域以外で働きたい理由をお知らせください。
あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 自分の能力が活かせそうだから
2. 希望する企業があるから
3. 知人が多いから
4. 家族を経済的に支えたいから
5. その地域が好きだから
6. 就職後の生活が精神的に楽だと思うから
7. 希望する給与や待遇が期待できるから
8. 出身地域と別の場所で生活してみたいから
9. 親と同居したいから
10. その他　（具体的に　　）

【みなさんにおたずねします】

問 14　民間企業で働くことを希望しますか。あてはまるもの 1 つに○をつけてください。

1. 民間企業を希望する。
2. 公務員を希望する。
3. どちらでもかまわない。

問 15　あなたが働きたいと希望している会社の業種を教えてください。
あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 公務　2. 農林漁業　3. 建設業　4. 製造業　5. 電気・ガス・水道業
6. 運輸・通信業　7. 卸売、小売業　8. サービス業　9. 金融・保険業
10. 不動産業　11. 教育・学習支援業　12. 医療・福祉　13. 飲食業・宿泊業
14. その他　（具体的に　　）

参考資料２

【これまでの生活について教えてください】

問 16　あなたの小学生・中学生・高校生のときのことについてお聞きします。以下のことを体験したことがありますか。それぞれの項目ごとにあてはまるものすべてに〇をつけてください。

		小学生で体験した	中学生で体験した	高校生で体験した	体験したことがない
1	学校行事以外で、野外で炊事をしたりテントに泊まったりしたことがある				
2	興味のある仕事について、本やインターネットなどで調べたことがある				
3	職場見学や職場訪問をしたことがある				
4	4 日以上の職場体験やインターンシップを体験したことがある				
5	地域の祭りに参加したことがある				
6	地域のイベントに参加したことがある				
7	地域のイベントの手伝いやごみ拾いなどに参加したことがある				
8	有料の学習塾やピアノ教室、水泳教室などの習い事に通ったことがある				
9	アルバイトをしたことがある				

問 17　あなたは東日本大震災から現在までで、つぎのようなことを行ったことがありますか。あてはまるものすべてに〇をつけてください。

1. 震災に関する情報を積極的に集めた
2. 被災地の家族・親戚、友人・知人に連絡をとった
3. 募金・寄付を行った
4. 被災地の食品・物産、支援グッズなどを購入した
5. 物資を送ったり、団体に提供したりした
6. 旅行で被災地に行った
7. 震災にかかわるボランティア活動を行った
8. この中に、おこなったことは１つもない

問 18　「震災にかかわるボランティア活動を行った」に〇をつけた方にお聞きします。

（1）　活動を行った場所はどこでしたか

1. 被災地　　（　具体的に　　）
2. 被災地以外で

（2）　どのように活動に参加したのか教えてください。

1. 現地の災害ボランティアセンターを通して
2. 学校のサークルや授業の一環で
3. ボランティア団体・NPO・NGO を通じて
4. 市町村、町内会など、地域のみなさんと
5. ご家族と一緒に
6. 団体に加入しないで個人で行った

【みなさんにおたずねします】

問 19　あなたはつぎのようなボランティア活動を行ったことがありますか。
あてはまるものすべてに〇をつけてください

1. 福祉に関係した活動（高齢者施設や福祉施設など）
2. 子どもに関係した活動
3. スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動
4. まちづくり・生活に関連した活動
5. 環境に関連した活動
6. 国際協力に関連した活動
7. その他（具体的に　　）

参考資料２

【これからの大学生活についてお尋ねします】

【アルバイトについて】

問 20　あなたはアルバイトをしていますか。

1. すでにしている　　2. まだしていないがやりたいと思っている。
3. 探している　　4. する予定はない

問 21　アルバイトをしている方にお尋ねします。一週間で合計何時間、働いていますか。

（**一週間合計　　時間程度**）

問 22　どのような仕事をしていますか。

1. スーパー、コンビニエンスストアなど
2. 洋菓子やパン屋、お弁当屋、ガソリンスタンド、本屋
3. デパート、アパレル、その他販売業種
4. ホテル、旅館、結婚式場
5. ファストフード店、ファミリーレストラン、カフェ、デリバリー店、寿司屋など
6. 居酒屋
7. カラオケボックス、ビデオレンタル、ゲームセンター、パチンコなど娯楽施設
8. 学習塾、家庭教師など
9. 警備、建築、土木、測量など
10. 引越、配送、郵便局、新聞配達など
11. 官公庁、国、自治体など
12. その他（　　）

【サークル活動について】

問 23　あなたは現在学内や学外のクラブやサークル、部活に所属していますか？

1. 所属している（**問 24 へ**）　　2. 所属していない（**問 25 へ**）

問 24　所属している方におたずねします。あなたが、サークルや部活に所属した理由は何ですか。
あてはまるものすべてに〇をつけてください

1. 交友関係が広くなるから
2. 友達や恋人ができるから
3. 先輩・後輩関係を築けるから
4. 就職活動に有利だから
5. コミュニケーション能力がつくから
6. 家族や友人の勧め
7. 高校までやってきたから
8. なんとなく

問 25　所属していなかった方におたずねします。サークルや部活に入らなかったのはなぜですか。
あてはまるものすべてに〇をつけてください

1. 興味がなかったから
2. 時間的余裕が無いから
3. 経済的な理由で
4. 勉強のために
5. 高校までで十分やり尽くしたから
6. 嫌な思い出が多いから
7. なんとなく、きっかけがなかったから

【みなさんにおたずねします】

問 26　「弘前（弘前市・つがる地域）」に対する意識についてお聞きします。
あてはまる数値に一つだけ〇を付けて下さい。

		あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
1	私は地域の一員であると感じる	1	2	3	4	5
2	私はこの地域の将来のことが、とても気になる	1	2	3	4	5
3	私はこの地域に愛着を感じる	1	2	3	4	5
4	この地域を離れることは、たとえ離れたくても、大変困難である	1	2	3	4	5
5	現在この地域にいるのは、そうしたいからであると同時に必要だからである	1	2	3	4	5

参考資料２

さいごに、あなた自身についておたずねします。

問 27　学籍番号

問 28　性別

1. 男性　　2. 女性

問 29　学部

（　　）学部

問 30　あなたが同居していた、あるいは同居しているご家族の方すべてに〇をつけてください。

1. 父親　2. 母親　3. 祖父・祖母　4. 兄　5. 姉
6. 弟　7. 妹　8. その他　（　　）

問 31　実家の所在地についてお知らせください。

1. 北海道
2. 青森県（弘前市・つがる地域）　3. 青森県（弘前市・つがる地域以外）
4. 岩手県　5. 秋田県　6. 宮城県　7. 山形県　8. 福島県
9. 関東甲信　10. 東海・北陸　11. 近畿　12. 中国・四国　13. 九州・沖縄
14. 外国

問 32　父親の出身地は実家の所在地ですか。

1. はい　　2. いいえ

問 33　母親の出身地は実家の所在地ですか。

1. はい　　2. いいえ

長い間のご協力、本当にありがとうございました

執筆担当者

氏　名	所　属	担当章
李　永俊	弘前大学	第１章
	人文社会科学部　教授・地域未来創生センター長	第２章
		集計表
花田真一	弘前大学	第３章
	人文社会科学部　講師	第４章

令和元年

大学生の地元意識と就業に関する
意識調査報告書

2020年３月
編集・発行
弘前大学人文社会科学部

弘前大学特定プロジェクト教育研究センター
地域未来創生センター
Innovative Regional Research Center

令和元年　大学生の地元意識と就業に関する意識調査報告書

弘前大学特定プロジェクト教育研究センター　地域未来創生センター